Clock Game

やくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｌｏｃｋ　Ｇａｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ３８５０Ｃ

【作者名】
やくも

【あらすじ】
臨海学校に訪れた生徒は、僕、高居信吾（たかいしんご）を含めて十二人。中二の夏、受験だ進路だで忙しくなる前のこの時期に、有意義な思い出の一つを作ろうと僕達は参加を決意した。そんな中、突然の大雨に見舞われた僕達は雨宿りしていた洞窟の中で隠し通路のようなものを見つける。興味本位と好奇心が率先して、僕達はその奥へと足を踏み入れた。そして、通路を抜けたその先にあったものは、まるでお化け屋敷を思わせるような古びた洋館だった。そこで僕達は、とんでもないゲームに参加することになる……。

ｓｔａｇｅ１：十二人の迷子

八月初旬――。

僕、高居信吾（たかい しんご）をはじめとした計十二人の生徒達は、毎年恒例のように行われている学校管理の臨海学校にやってきていた。

夏休みの時期を利用した思い出作りというのが表向きキャッチフレーズではあるが、実際は勉強合宿と似たり寄ったりな部分が少なからずあるので、多くの生徒はどちらかというと敬遠気味のイベントだ。

そんなイベントではあるが、中学二年のこの夏は、ゆっくりと遊べる最後の時期と言っていいだろう。

この時期を過ぎれば進路や受験という言葉は、否が応でも僕たちにまとわりついてくることになる。

とはいっても、僕自身はそこまで大きな問題だとは思ってはいない。

確かに進路のことは大切だとは思うけど、こんなに早い時期から準備しなくてもいいんじゃないかな、と思う。

もっとも、そんな僕の考え方が世間では甘い考えとか、単なる先延ばしに過ぎないとか、そういう風に言われているのだろうけど。

まぁ、とにかく。

僕を含めてここに集まった十二人は、皆同じ中学の二年生で面識もあり、それなりに仲の良い面々だ。

夏休み前にたまたま一同が一斉に顔を会わせる機会があり、そのときにひょんな話の流れで臨海学校に参加してみないかということになったわけだ。

そして瞬く間に時間は過ぎ、七月が終わり、八月がやってきた。

僕達十二人は約束の時間に駅へと集合し、そこから電車とバスをいくつも乗り継いでこの場所にやってきた。
都会の喧騒から離れ、まだ自然が多く残る……言ってしまえば田舎同然の何もないところだけど、僕達にはそれが逆に新鮮で、この歳になってもどこかで胸の高鳴りに似たようなものを感じていたのかもしれない。
きっとこの合宿は、いい思い出になるだろう。
僕だけじゃなく、誰もがそう思っていたはずだ。
……そう。
少なくとも、こんなことに巻き込まれる前までは……。

「……雨、なかなか止まないね」
「……だな」
外を見れば、そこは土砂降りの大雨が降っている。
天気予報では晴れと言っていたにもかかわらず、この有様だ。
全く、社会はますます情報化が進んでいるというのに、当たらない天気予報ほど頼りないものもない。
「ま、仕方ないだろ。山の天気は変わりやすいって言うしな」
「そうそう。それに、こうやって雨宿りできるだけまだマシってもんだよ。なぁ、浩二」
「まぁ、そりゃそうなんだけどよ……」
地図を広げ、浩二は続ける。
「ここからだと、宿までは短く見積もっても二キロ近くある。とてもじゃないけど、この雨の中を歩く気にはなれないよな」
「気長に待つしかないみたいね」
「そうね。知らない土地だし、ヘタに動いてますます道に迷ったりしたらシャレにならないもの」
「うー、何か雨って憂鬱になってくるよ。空気もジメジメするしさ

あ……」
「そういえば、今年の梅雨明けっていつ頃だったっけ？」
「さぁ？　っていうか、梅雨なんてあったか、今年？」
と、皆口々にそんな会話を繰り返している。
状況だけ見れば前途多難にも思えるけど、誰もがそこまで危機的なものを感じているわけではなかった。
足止めこそ食らっているものの、それは所詮ただの天候の悪化という原因のためだからだ。
時間はかかるかもしれないが、じきに晴れるだろう。
そうしたら宿に向かえばいい。
僕を含めた誰もがそう思っていたに違いない。
「ねぇねぇ、ジッとしてるのもあれだしさ。私、ＵＮＯ持ってきたんだけど、時間潰しに皆でやらない？」
「お、いいな。皆でやろうぜ」
「康祐、お前もやろうぜ」
「ん？　ああ、悪い。俺は本読んでるから遠慮しとくよ」
「相変わらず橘は文学少年だね。でも、こんな暗いところで読んだら目を悪くするよ？」
「大丈夫。ランタンもってきたんだ」
「準備のいいやつ」
「信吾も酒井もこっちこいよ。やろうぜ」
「あ、うん」
呼ばれ、僕と志保も皆の輪の中に加わった。
背中では、ザァザァと土砂降りの雨が降り続く音だけが響いていた。
それもきっと、もうしばらくの辛抱。
そう、思っていた。
……だけど。
……あれから二時間が経った。

僕達がバスを降り、この地に着いたのが確か午後の一時過ぎ。
腕時計の時刻は、現在午後の四時半を示している。
およそ三時間、僕達はその間ずっと大雨の足止めをされ、この洞窟の中で時間を過ごしている。
「ＵＮＯ！」
「げ、マジかよ……」
「そうは……いくかっての！」
「ほい、追加」
「うっそ、八枚？　きっついなぁ……」
「……ねぇ」
「ん？　どうした斉木？」
その言葉に、皆の視線が自然と集まった。
「この雨さ、いつになったら止むのかな？」
視線が今度は外の景色へと移る。
相変わらずの土砂降りの雨。
いくらか勢いは弱まったようにも見えるが、それでもまだ雨脚は強い。
「確かに、ちょっと長いな」
「そう、だね。夕方までには止むって思ってたけど……」
「あんまり遅くなると、宿の人も心配するかもしれないしな」
「なぁ、一回連絡しといたほうがいいんじゃないか？　雨で足止めされてます、ってさ」
「その方が良いかもね。それに、もしかしたら迎えに来てくれるかもしれないし」
「誰か、宿の電話番号分かるやついるか？」
「あ、私分かるよ。パンフ持ってきたから」
「お、見せてくれ。俺がかけるよ」
パンフレットを受け取り、秦が携帯電話でその番号を押す。
だが。
「……あれ、通じないぞ？　って、ここ圏外じゃんか」

「げ、マジで？」
「参ったな、これじゃ連絡もできないぞ……」
……この時点で。
僕達は、気づかなくてはいけなかったんだ。
天気だけのせいじゃない、もっと別の謎めいた何かが、身の回りで息を殺して潜んでいたことに……。

そして、さらに一時間が経過した。
「……なぁ、さすがにもうヤバクねぇ？」
「……ちょっと、暗くなってきたね」
「うわっ！」
「な、何？　どうしたの？」
「げ、雨水が中に入ってきてやがる」
「おいおいマジかよ……」
「……仕方ない、出ようぜ。ここにいたら水浸しになっちまうよ」
「でも、どうすんのよ？　道は大体分かってるにしても、この雨じゃまともに視界がはっきりしないわよ？」
「ほとんど一本道なんだ、迷うってことはないだろ。それに、ここにいたってどの道濡れるんだ、雨の下に出たって大して変わんないだろ」
「あーもう、だから雨は嫌いなのよ」
「グチはそこまで。ほれ、さっさと荷物持って準備しようぜ」
僕を含め、全員がそれぞれの荷物を手にし、この洞窟を出ることになった。
確かに外の雨はまだ強いけど、いつまでもここにいたって仕方がないだろう。
「よし、行くぞ」
「あ、ちょっと待って……って、うわぁ！」
ゴトンと、そのとき何かが外れるようなそんな音がした。
「おいおい、何やってんだ……」

浩二のその声が、ふと途切れる。
「大丈夫、こだま？」
「あたたた……うん、何とか……って、あれ？」
ふと気がつくと、皆の視線がそこに集中していた。
こだまが転んでしまった岩肌の、さらに奥。
岩盤の一部が崩れ落ち、その先に通路のような道がポッカリと顔を覗かせたのだ。

「な、何これ？　隠し通路ってやつ？」
「んー……一応、俺達くらいの体格なら通れそうだな」
「ちょ、ちょっと、まさかここ通っていくつもりなの？」
「面白そうじゃん。俺は賛成」
「俺も俺も」
「確かに面白そうではあるけどさ、どこに通じてるかも分からないんだよ？　ちょっと、危ないんじゃないかな？」
「平気だって。だってこれ、明らかに人の手で作られた感じだぜ？」
「言われてみれば、確かに……」
「だったらせめて、誰か試しに中の様子見てきてよ。虫とかいたら、私嫌だし」
「ま、もっともだな」
「あ、じゃあ僕が見てくるよ」
「高居君？」
「信吾？」
「大丈夫。こういう狭いところ入るの、慣れてるからさ」
そう。
僕の家には屋根裏部屋があって、僕は幼い頃からそこに潜り込んでは遊んでいたことがあるのだ。
それでよく、体中クモの巣だらけにして母さんに怒られたりもしたけれど。
「んじゃ、俺も一緒に行くわ」

「秦……」
「康祐、そのランタン貸してくれ。さすがに明かりなしだとよく見えそうにない」
「ああ、いいよ」
秦は康祐からランタンを借り、その明かりで通路を照らした。
「よし。行こうぜ信吾」
「うん」

僕は秦と一緒に通路の奥へと進む。
ところどころで岩肌がゴツゴツしている部分こそあるものの、足元は安定しているし、虫などの気配もないようだ。
「大丈夫。何もないよ」
「虫とかいない？」
「平気だ。何もいない」
それだけ報告すると、皆の些細な不安もなくなったようだった。
そして僕達は、改めてその通路の中へと一人ずつ入っていく。
「あ……」
皆が次々に中へ入っていく中、志保だけが一人中に進むことを躊躇していた。
それを見て僕は、ハッと思い出した。
「志保」
「え？」
「僕が先に行くから、その後についてきなよ。大丈夫だから」
僕と志保は幼馴染なので、志保狭いところを怖がってしまうことを僕は知っていた。
「ね？」
「……うん」
その言葉で少しは安心してくれたのか、僕の後に続いて志保はゆっくりと足を踏み入れた。

通路の中は正直言って狭かった。
高さはおよそ二メートルほどはありそうなので、高さに関しては問題ない。
が、横幅が狭いのだ。
多分、一メートルもないと思う。
なので、僕達は縦一列になって少しずつ進むことしかできなかった。
目印であるランタンの明かりも、こうして見るとずいぶんと遠くに見え、時折頼りなく見えてくる。
「志保、平気？」
僕は振り返り、声をかける。
「う、うん。何とか……」
口ではそう答えるが、やはり志保にとっては相当キツイのかもしれない。
そのことをうっかり忘れてしまっていた僕にも、多少の責任はある。
せめて出口がそう遠くないところにあってくれればいいのだが……。
と、そんなときだった。
「おーい、出口見えたってよ」
前方を歩く浩二から、そんな声が届いた。
見てみると、確かにランタンの明かりとは別に外の光がそこにはあった。
「志保、出口が見えたってさ。もうちょっとだよ」
「う、うん……」
前を歩く皆が次々と外に出て行く。
ようやく僕の目の前にも外の光が見えてきて、暗い通路の中から顔を出そうとした、そのときだ。
「え？」

ふいに力強く、僕の手が握り締められた。
それは紛れもなく志保のものだった。
……だったが、どこか様子がおかしい。
握り締められたその手は、小刻みに震えを繰り返していた。
まるで、心の底から何かに恐怖しているかのように。
「……志保？」
しかし、僕にはそれが不思議でならなかった。
単に怖がっていただけなのかもしれないけど、何しろ出口はもう目と鼻の先にある。
当然、僕のすぐ後ろを歩く志保にだって、外の光はしっかりと見えているはずなのに。
なのに、一体どうして……。
こんなにも怯えたような震えが伝わってくるのだろう？
「どうした、信吾？」
「あ、うん。何でもないよ」
僕はとりあえず志保の手をしっかりと握り返し、少しでも安心させようとした。
だからまず、握った志保の手をそのまま引っ張って、僕より先に外に連れ出した。
最後に僕が外に出る。
するとそこは、実に不思議な場所だった。
「……晴れてる？」
まず、先ほどまでの大雨が嘘のように空が晴れていた。
とはいっても、太陽の見える晴れた空ではなく、雲だらけでどこか暗鬱な気分を覚えるような空だった。
周囲は木々の生い茂る林……あるいは森と呼んでもいいくらいの広い空間で、野鳥の声がどこからか聞こえていた。
樹海とはこのような場所のことを言うのかもしれない。
「ちょっと、皆こっちきてよ」

その声に誘われ、十二人全員が集まる。
「見てよ、あれ……」
安藤が指差すその方向に。
「何だよ、あれ……」
「誰かの別荘、か？」
「いや、別荘って言うよりも、あれは……」
「……まるでお化け屋敷そのもの、だよな？」
僕達の眼前にあったもの。
それは、古びた洋館をイメージさせる、一つの屋敷だった。
僕達の立つ場所と屋敷の間は、高さ十メートル以上の崖になっており、その下は河が流れている。
屋敷までには一本のつり橋が架けられており、そのつり橋だけがこっちと向こうを行き来できる唯一の手段のようだ。
「……嫌、だ」
「志保？」
ふと、志保は僕にだけ囁くような小声で呟いた。
「……ここ、嫌だよ。何か、おかしい……」
「……」
その言葉の意味を、僕は理解できなかった。
ただ……。
目の前に聳えるあの屋敷から、不気味な雰囲気のようなものを本能的に感じ取っていたのは、きっと僕だけじゃない。
そしてここから、始まることになる。
世にも不思議な、一つのゲームが……。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ｓｔａｇｅ１：十二人の迷子（後書き）

初めての人は始めまして、他の作品にて名前をご存知の方はこんにちは。
作者のやくもと言います。
本作「Ｃｌｏｃｋ　Ｇａｍｅ」はホラーのジャンルで連載していますが、具体的にはミステリー要素も含んでいるので、ホラー＋ミステリーと言ったほうがジャンルとしては正しいかもしれません。
時期的にも夏ですので、それっぽいものを書いてみたいという何の策略もない考えで思いついた作品ではありますが、読者のかたがたに少しでも楽しんでいただければ幸いです。
とはいえ、夏の間に連載が無事終了するかどうかは定かではありませんので、ご注意を。
そんな感じではありますが、よろしければ読んでやってください。
それでは、これにて失礼します。

stage2：隔離

「すげーな、これ。やっぱ別荘か何かなのかな？」
「こんなところに別荘なんて、物好きよね……」
「ていうかさ、そんなことより、ここどこだ？」
その言葉に皆は一斉に周囲を見回し始める。
が、どこを見ても似たような景色ばかりが続いている。
あたり一面はうっそうと生い茂る雑木林。
どこを見ても人の手が入ったような小道はなく、林の中を突っ切るしか先に進むことはできなさそうだ。
「ダメだな。どこにも道らしい道は見当たらない」
「おとなしく引き返すか？」
「それよりもさ、聞けばいいんじゃねーの？」
「聞くって、誰に？」
「そりゃあ……」
そして誰からからともなく、皆の視線は一点に集中する。
つり橋を渡った向こう側、静かに佇む洋風の屋敷へと。
「まぁ、その方が早いかもしれないな」
「えー、この橋渡るの？　何か今にも腐って落ちそうじゃない？」
「え、縁起でもないこと言わないでよ」
「とりあえず、行くだけ行ってみようぜ。誰もいなかったら仕方ないけどさ」
「だな。ヘタに道に迷うよりはいいよな」
「いや、私は素直に戻ったほうがいいと思うんだけど……」
「聞いてないよね、もう」
すでに大半の足はつり橋に向かって歩き出していた。
最初に浩二が橋の上に乗ると、見かけよりも作りはしっかりしているらしく、五人ほど乗っても軋むことはなかった。

「しょうがないなぁ……」
あまり乗り気ではなかった三上と木村も、しぶしぶ後に続いていく。

「僕達も行こう、志保」
「……あ」
「どうかした？」
「あ、えっと……やめたほうが、いいと思う」
「え……」
「おーい、何やってんだよ二人とも。置いてくぞー？」
橋の上から豊の声がした。
「ごめん、すぐ行くよ」
僕はそう返しておく。
「……何か、嫌な感じがする。今の洞窟の中もそうだったけど、それよりももっと嫌な感じが、あの家からする」
「……志保」
志保のこれは、いわゆる霊感に似たようなものだ。
物心ついた頃からこんな感じで、過去にも同じようなことが何度かあった。
「大丈夫だよ。ほら、皆も待ってるしさ」
「……でも」
「心配ないって。ちょっと道を尋ねにいくだけなんだしさ。ね？」
「……う、うん。分かった……」
まだどこか気が進まない様子ではあったけど、志保もとりあえず頷いてくれた。
僕達も皆に続いてつり橋を渡り、屋敷の前へとやってくる。
「何か、近くで見るとますますそれっぽい雰囲気だな」
「そんなに古臭い感じじゃないけど、人が住んで生活してるようには見えないわね」
「じゃあ、やっぱり誰もいないんじゃないの？」

「ま、考えるより聞いたほうが早いだろ」
そう言うと、浩二は屋敷の入り口に立ち、その扉を軽くノックした。
「すいませーん、どなたかいらっしゃいませんかー？」
「……」
残りの十一人はその様子を黙って見ていた。
が、浩二のノックからしばらくしても中からは何の返答も返ってこない。
「すいませーん、誰もいませんかー？」
今度は先ほどよりも少し強く扉を叩いてみる。
ドンドンと、静まり返った林の中にその音がこだまする。
その音に驚いたのだろうか、渡ってきたつり橋の向こうの空で野鳥が一斉に空へ飛び立っていた。
バサバサという羽ばたきの音が徐々に遠ざかり、その残響がどうしてか僕達の胸を不安色に染め始める。

「ダメっぽいな。いないみたいだ」
またしばらくの間返答を待っていたが、やはり人のいる様子はないようだ。
仕方ないので、僕達は自然と来た道を引き返す雰囲気になっていた。
が、しかし。
「あれ？」
「どうかしたの、縁？」
皆の視線がそこへと集中する。
麻生はぼんやりと、上のほうを眺めていた。
僕はその視線を目で追ってみると、その先には屋敷の二階にある一室の窓があった。
が、どういうわけかそれが……。
「……窓が、開いてる？」

「え？」
僕が呟くと、さらに皆の視線がそこに集中した。
正面から見て、二階の一番左の部屋。
その部屋の窓だけが、細く開いていた。
隙間からはその部屋に備え付けられている黒いカーテンがヒラヒラと風に揺れ、見方によってはそれが手招きのように見えて不気味だった。
「……閉め忘れたの、かな？」
「無用心だな。これじゃ泥棒とか入っちゃうんじゃないか？」
……いや。
僕はそのとき、全く違うことを考えていた。
そしてどうやら、僕以外にも同じことを思った人がいたようで……。
「……あのさ」
ふと、どこか重苦しい口調で康祐が口を開いた？
「何、橘？」
「俺さ、さっき橋の上からチラっと見たんだけど」
「何だ何だ？　まさか、幽霊がいたとか言い出すんじゃないだろうな？」
「うわ、そんなの今時笑えないよ？」
などと、何人かはそんな風に茶化して笑い出す。
しかし、康祐の表情はそんな感じのものではなかった。
僕にはそれが分かる。
きっと、康祐も気づいたんだ。
その、違和感に。
「――開いてなかったんだよ」
康祐その一言に、場の空気は一瞬だが確かに凍りついた。
誰もがその言葉の意味を、頭の中で整理し始めていた。

しかし、どれだけ探し回ったところで、その言葉の意味に該当するものは、たった一つしかなく。
「……開いてなかったって？」
「……何、が？」
皆もう、頭の中で答えは出ているはずなのだ。
でもあえて、その問いを口に出さずにはいられない。
誰かが自分と違う答えを言い、それに納得できさえすれば、押し寄せる不安から開放されると思っているから。
しかし、それでも。
康祐ははっきりと、その目で見たままの事実を告げた。
「――あの窓、橋の上を歩いているときに見たときは……閉じてたんだ」
「……っ！」
誰もが息を呑んでいた。
その言葉が発せられるということは、分かっていたにもかかわらず、だ。
「お、おいおい、何言ってんだよ？　見間違いか何かじゃないのか？」
「そうだよ。ほら、たまたま木に隠れて見えてなかったとかさ」
「それはないと思う」
僕は言葉を挟んだ。
「康祐だけじゃなく、僕も見たんだ。さっきまであの部屋の窓は、間違いなく閉まってたよ」
そう。
僕も見たのだ。
志保の手を引いて橋を渡っているとき、ふと視界に映りこんだもの。
そのときは、屋敷の正面に見える二階の窓、計六ヶ所は全て……

しっかりと閉じていたのだ。
「で、でもさ、そんなにおかしく考えることでもないんじゃないかな？」
青葉の言葉に皆の視線が移る。
「単純に考えてさ、誰かが空気の入れ替えとかで開けたのかもしれないし。たまたま私達が、それに気づかなかっただけとかでさ……」
「……誰かって、誰？」
細い声で志保が聞く。
「え？　そ、それはやっぱり……この屋敷の持ち主とか、住んでる人じゃ……」
「それってつまり、今も中に人がいるってことだよな……？」
「……さっき、あれだけノックしても反応なかったのにか……？」
「そ、それは……」
皆の言葉が続かなくなる。
心のどこかでは、そんなことはありえないと分かっているはずだ。
……けれど。
もしかしたらというその不安が、次第に膨れ上がってきていた。
気がつくと誰も一言も発さず、ただ静寂だけが場を支配していた。
林の中を吹き抜ける風の音さえも、今はこの世のものではない呻き声のように聞こえて仕方がない。
しかしそんな静寂は、あっさりと破壊される。

――ガチャン。

「っ！」
誰もが声を殺して、音の方向に振り返った。
音がしたのは、正面の玄関の扉の方向。
いや、扉そのものからその音は聞こえていた。
全員が息を呑む。
それぞれの心臓、計十二の鼓動がどんどん高鳴っていく。

不安、恐怖、緊張。
あらゆる糸がピンと張り詰めて、切れる寸前まで引き伸ばされている。
そしてそのギリギリのところで耐えていた糸を、あっさりと切り刻んでいくもの。
それは、風。
僕達の目の前を風が通過する。
そして、鳴り出す音。
キィィィ……と、古びた音を奏でながら……玄関の扉が、開いた。
「……何だよ、これ」
「……実は、最初から鍵はかかってなかったとか、そういうのじゃねぇの？」
「……さっき、一応押したり引いたりもしたけど……全然動かなかった」
「ちょ、ちょっとやめてよ。気味が悪い……」
「ね、ねぇ、ここ、なんかヤバイよ。戻ったほうがいいんじゃないかな？」
「っ、私も賛成。大人しく引き返したほうがいいって、絶対」
口には出さずとも、皆恐怖を感じていた。
もいろんそれは、僕だって同じことだ。
恐怖というまで大げさなものではなかったけど、何か嫌な雰囲気を感じ取ってはいた。
志保が言っていたものは、これだったのかもしれない。
とにもかくにも、この場に長居したくないということは同感だった。
僕達は来た道を引き返し、またあの洞窟へと戻ることに……。
「……嘘、でしょ……？」
「おい、どうした……」
「な、何で？　どうなってんの？」
「そんな……冗談だろ、おい……」

皆のそんな声は、虚しく林の中に吸い込まれていった。
僕もすぐ傍に駆けつけ、そしてありえない光景を目にする。
「……そん、な……」
そして僕も、目にした光景に言葉を失った。
皆、呆然とただ立ち尽くしている。
だって、そうすることしかできないのだ。
僕達の、目の前には……。

「――橋が、消えた……？」

向こう岸に戻る唯一の手段が、忽然とその姿を消してしまっていたのだから……。

To Be Comtinued・・・

ｓｔａｇｅ３：クロックゲーム

「何だよ、これ。一体どうなってんだよ！」
確かに僕達は、つり橋を渡って対岸のここにやってきた。
にもかかわらず、そのつり橋は僕達の目の前から忽然とその姿を消してしまっていた。
目の錯覚……であってほしいのだが、どうやらそういうわけではないようだ。
「嘘、でしょ？　そんなこと、あるわけないじゃない！」
「手分けして、周りも探すんだ。似たような景色ばっかりで、少し場所を勘違いしてるのかもしれない」
「そ、そうだよね。皆で探そう」
「よし、手分けして探すぞ」
誰が言い出したわけでもなく、皆は周囲に駆け出していた。
けど僕は、どういうわけかそれが全て無駄なような気がしたんだ。
だって、橋を渡ってから僕達は真っ直ぐ歩いて屋敷の正面にやってきたんだ。
だったら、僕らの真後ろにつり橋がなくてはいけないはず。
けど、そこにつり橋の姿はない。
だったらきっと、他の場所にあるはずなんてないんだ。
僕達が橋を渡ったのは事実。
そこに橋があったのも事実。
ならば、今こうして目の前から橋が消えてしまったのもきっと……認めたくはないけど、事実なんだ。
「おい、そっちはどうだった？」
「ダメ、見つからない！」
「こっちもダメだ、橋なんかどこにも見当たらない」
「くっそ、一体どうなってんだよ？　何でさっきまであったはずの

橋が、いきなり目の前から消えちまうんだよ？」
「私達、集団で悪い夢でも見てるのかな……？」
「しっかりしろよ、そんなわけないだろ？」
「けど、だったらどうして橋がなくなってるのよ？」
「そんなの俺が知るわけないだろ！」
「怒鳴らないで！　ただでさえ頭がこんがらがってるんだから！」
皆の様子が変わる。
いや、こんなわけの分からない状況になっているんだから、どうにかならないほうがおかしいのかもしれない。
そのくせ僕はどうしてか、あまり焦ったり不安を覚えてはいなかった。
目の前でおかしなことが起こっているというのに、どうしてなんだろうか。

「……とにかく、ないものを探したって見つかりっこねーんだ。他の方法を考えるしかないだろ」
「そうだけど、どうするつもりだよ？」
「……向こう岸までは軽く三十メートルはある。間は崖になってて、下は流れの速い河だぞ？」
「崖の高さは……大体十メートルちょっとってとこかしら。ロープか何かあれば降りれない高さじゃないけど、そんなもの持ってきてる人いる？」
「無茶言うなよ。臨海学校にそんなもん持ってこないって」
「……そうだよね」
「それに、仮にロープがあっても降りるのは無理だと思うよ」
「どうして？」
「崖の下まで降りたとしても、そこに足場がない。そのまま河の中に直行したんじゃ、ロープごと流されるだけだよ」
「……結局、どうしようもないってことか」
結論に至り、しばしの沈黙が流れる。

大人しく助けが来るまで待っているという手段もあったが、こんな場所に足を踏み入れる人がいるだろうかと考えると、それはどう考えてみても望み薄だ。
そして誰が言うわけでもなく、皆の視線は再びそこに集中する。
半開きになった屋敷の正面玄関の扉。
まるで、入っておいでと言わんばかりに口を開けて待っている。
あれだけノックしても、声をかけても反応を示さなかったのに、その入り口がこうも無防備に開いていると、逆に不気味でしかない。
もちろん誰もが、その目には見えない嫌な感じを肌で感じ取っていた。
が、ここにきて状況はなりふり構っている場合ではなくなってきているのも確かだ。
だから皆、本当は待っていたのかもしれない。
誰かがその言葉を、口に出すのを。
「……なぁ、とりあえず、さ……」
「……うん」
「やっぱ、そうするしかない……よな？」
「あんまり、気は進まないけど……」
「仕方、ないよね？」
「……だな」
中に入ってみよう。
言葉には出さずとも、意思は統一していた。
もしかしたら、中にはちゃんと人がいるのかもしれない。
たまたま寝ていたとか、トイレに行ってたりして声が届いていなかったとか。
そんな一縷の望みを胸に、僕達は正面玄関に歩み寄った。
薄く開いたままの扉。
内側からは人の気配もせず、外の曇り空が明るく見えるくらいに中は暗がりが広がっているようだ。
「……よし、行くぞ」

皆、その言葉に無言で頷く。
浩二はそっと扉の取っ手を握り、引き開けた。
「……すいません。誰か、いませんか？」
小声で呟く。
屋敷に中はシンと静まり返り、真夏だというのに寒気を覚えるほどだった。
「誰か、いませんか？」
「俺達、道に迷っちゃったんですけど」
言葉を投げては見るものの、やはり返事はない。
「なぁ、電気のスイッチとかないのか？　これじゃ暗くて何も見えないぜ」
「ここが玄関なら、壁にスイッチがあってもいいんだけど……」
暗がりの中、手探りでスイッチを探す。
「あ、あった。多分これだよ」
パチンと音がして、頭上が白い光に覆われる。
と、同時に。
「うわあああああ！」
「ひ……」
「うわ……」
悲鳴にも似た驚愕の声が響く。
僕もその光景に、思わず息を呑んでいた。
「……」
僕達の目の前に、一人の……恐らく男の人が立っていた。
なぜ恐らくという言い方をするのかと言うと、その人の顔が見えないからだ。
黒いスーツに身を包んだその人は、その顔を白い仮面で覆い隠していたのだ。
舞台やミュージカルでよく見る、目を口の部分が三日月形にくりぬかれたもので、鼻の部分にも空気穴がつけられている。

その外見があまりにも不気味で、思わず僕達は言葉を失ってしまった。
その人はジッと僕達の様子を伺うようにしていたが、しばらくしてからおもむろにその口を開いたのだ。
「こんなところで立ち話もなんですし、どうぞこちらへ」
その声色はやはり男性のもので、比較的にまだ若いイメージを受けるものだった。
口調はどこか機械的にも思えたが、どちらかというと柔らかいものだった。
そのおかげで、僕達の中の恐怖心は少しではあるがなくなっていった。

仮面をつけた男性は、ゆっくりと歩いていってしまう。
玄関の奥は広いロビーで、左右の壁には二階へと続く階段が設置されている。
仮面の男性が向かうのは、ちょうど玄関から見て真正面に位置する、別の部屋の扉だった。
僕達はしばらく玄関の前で立ち尽くしていたが、男性の声に安堵を覚えたこともあって、一人また一人とその後についていく。
「あ、あの、靴はどうすれば……」
「土足で構いません。さぁ、こちらに」
言われるがままに、僕達は男性に続いて歩く。
そして十二人全員が新たな扉の前に揃ったとき。
バタンと、玄関の扉が閉ざされる音がした。
その音に、反射的に僕達は後ろを振り返る。
外に繋がる唯一の扉は、すでに硬く閉ざされていた。
その出来事にまた、僕達の不安は募り出す。
一体どうやって、扉を閉じたのだろうか？
遠隔操作？
それとも、風？

人の手によるものなら、それこそ一体誰が？
様々な疑問が浮かぶ中、それらを全部無視して仮面の男性は続ける。
「こちらへどうぞ。主がお待ちです」
「……主？」
「このお屋敷の、持ち主ってことですか？」
「……」
質問に対する答えは得られなかった。
仮面の男性は沈黙を守ったまま、ただ静かに二つ目の扉を押し開ける。
ギィィィと、古めかしい音と共に扉が開く。
その部屋の中は薄暗かった。
明かりこそあるものの、電気による照明ではない。
部屋はその全体が円形に作られており、壁には蜀台に乗せられたロウソクの炎が揺れている。

「こちらへ」
そう告げると、仮面の男性はまた一足先に歩き出してしまう。
仕方なく僕達もそれに続き、円形の部屋の中心に案内される。
そこには小さなテーブルが一つだけ用意されており、その上には何やら紙束のようなものが置かれていた。
僕達全員がテーブルの前にやってくると、仮面の男性はその紙のうちの一枚を手に取り、こう言った。
「あなた達に主からのメッセージを伝えます」
「……主からの」
「メッセージ……？」
当然のように疑問の声が上がる。
しかし、それも全て無視して仮面の男性は続けた。
「この度は我が館を訪問してくれたこと、非常に嬉しく思う。さて、早速ではあるが、諸君らは早々にこの館周辺で不可思議なことを体

験したものと思われる。結論から言うと、今のままでは諸君らは向こう岸へと戻ることはできない」
「う、嘘でしょ？」
「冗談じゃない！　どういうことだよ！」
口々に声が上がる。
が、それさえも無視して仮面の男性は続ける。
「話は最後まで聞いてほしい。確かに今のままでは諸君らは向こう岸に戻ることはできない。なぜなら、橋がないからだ。その橋のことだが、あれは私の意志一つで自由自在に出したり消したりできるモノなのだ。信じられないかもしれないが、そういう代物なのだ」
「何よ、それ……」
「……とりあえず最後まで聞こうぜ。まだ続きがありそうだ」
話が続く。
「もちろん諸君らとしても、この場に居留まる理由がない限りは帰りたいと思っているだろう。そこで一つ提案がある」
無言で全員が息を呑んだ。

「――これから行うゲームに、君達に参加していただきたい。それに無事勝利すれば、君達を帰してあげよう」

「……ゲーム？」
「ふざけないでよ！　どこの金持ちの道楽か知らないけど、そんなものに付き合う必要なんて私達にはないわ！」
「そ、そうだよ。いいから橋を出してよ、自由自在なんでしょ？」
「……」
しかし、仮面の男性は沈黙を守り続けるだけ。
まるで本当に、与えられた任務だけを全うする機械のようだ。
「やってられるかよ。俺はパスするぜ」
「俺もだ。付き合ってらんねーよ」
口々に吐き捨て、来た道を引き返す。

だが。
「……あれ？　おい、開かないぞ？」
「そんなわけ……あれ、何でだ？」
ガチャガチャとドアノブをひねり、扉を叩く。
が、閉ざされた扉はびくともしない。
「ちょっと、どういうこと？」
仮面の男性に問いかける。
しかし、返答はない。
「この……！」
「待てって、落ち着け」
「だけど……！」
「……つまり、こっちの意向なんて最初からどうでもいいってことね。何が何でもそのゲームとやらに、私達を参加させるつもりなのよ。この館のご主人様とやらは」
「ふざけんなよ、どうしてそんなのに俺達が付き合わなくちゃ……」
「けど、それに勝てば俺達を帰してくれるんだろ？」
「あんな紙に書いた約束事を律儀に守ると思うか？　こんな扱いするようなヤツだぜ、ロクでもないヤツに決まってる」
「……でも、このままじゃ話が進まないし」
「……とりあえず、もう少し話を聞こうぜ。ゲームっていったって、俺達はまだその内容もルールも何も知らされてないんだ。それを聞いてからでも、結論出すのは遅くない」
「……そうだね」
「っ、勝手にしろよ。俺は知らないぜ」
話が丸く収まったわけではないが、とりあえず僕達は話しの続きを聞くことにした。
その様子を見計らって、仮面の男性は変わらぬ口調で紙に書かれた言葉を読み始める。
「では、説明しよう。今から君達に参加してもらうゲームについて。そのゲームとは……」

一拍の沈黙。
後に、仮面の男性は告げる。
「――クロックゲームだ」

ｓｔａｇｅ４：矛盾のルール

姿も見えない館の主から、僕達十二人はあるゲームへの参加を余儀なくされた。
ゲームの名前は、クロックゲーム。
聞いたことのないそのゲームとは、一体どんなものなのだろうか……。
「クロックゲーム？」
「知ってる？」
「ううん。聞いたこともないよ」
皆口々に話し始める。
僕もそんな名前のゲームには覚えがなかった。
と、そんな困惑する様子の僕らを尻目に、仮面の男性は変わらぬ口調で紙面を読み上げていく。
「諸君らが混乱するのも無理はない。何しろこのクロックゲームというものを考案したのは、ほかならぬ私自身だからだ」
確かにそれなら知らないのも当たり前か。
「よって、まずはこのゲームがどのようなものなのか、そしてルールに関して少し説明をしようと思う。途中で質問なども出るとは思うが、それらは一通りの説明が終わってからまとめて受け付けるものとする」
そこまで読み上げて、仮面の男性は別の紙を手に取った。
「それでは説明しましょう。今から参加していただく、クロックゲームについて」
男性の言葉に、僕達は静かに息を呑んだ。
「まず始めに、このゲームがいかなるものなのか。それを説明していきましょう」

そして仮面の男性は、もう一枚別の紙を手に取った。
それはどうやら、図のようなものが描かれているものだった。
「この図面は、この館の一階部分の簡単な見取り図になります。向かって下側がさっき入ってきた玄関。そして現在はここ……ちょうど館の中央に位置する大部屋になります。今いるこの大部屋は、円形の造りをしています。そしてそれぞれの壁には、一から十二までの番号が降られた小部屋が用意されています」
言いながら、仮面の男性は周囲をぐるりと指差した。
僕達はそれに倣い、ぐるりと周囲を見渡した。
確かに言われたとおり、番号の振られた十二個の扉が確認できる。
「これからまず皆さんには、一人一つの部屋にそれぞれ入室していただきます。皆さんの人数も十二人なので、ちょうど部屋も埋まります。そして全員がそれぞれの部屋では位置についてから、ゲーム開始となります」
何だろう、小部屋で耐久勝負でもするのだろうか。
例えば、暖房やストーブをたくさんつけて、さながら我慢大会みたいに。
僕はふとそんなことを考えていたが、案の定、そんなゲームであるわけがなかった。
「ゲーム開始と同時に、まず一番の部屋の者が部屋を移動します。移動するといっても、一度部屋から出て別の部屋に移動するというわけではありません。十二の小部屋の中には、部屋同士を繋ぐ扉が用意されています。それを通って、隣の部屋に移動してもらいます。つまり、開始の合図と同時に一番の部屋の者が扉を使って二番の部屋へ移動する。そこでは当然二番の部屋に配置された別の誰かがいるわけですが、そこでまず何もせずに五分間を過ごしていただきます」
「五分間？」
「はい。お喋りをしたりしてもらっても構いません。ですが、時間

は厳守してください。五分が経過したら、今度は今と同じ手順を二番の部屋の者が実行します。そうすると、二番の部屋の中には一番の部屋からやってきた者が残ることになりますが、その者は次の自分の順番がくるまでその場で待機することになります。移動した二番の部屋の者は三番の部屋へ行き、同様の手順を繰り返します。これを五分ごとに連続して行うことにより、一時間で全員が一つずつ部屋を移動するようにします。この一時間の流れを一サイクルとして、皆さんにはこれを人数分……即ち十二サイクル、十二時間かけて行っていただきます」

「じゅ、十二時間？」

「ちょっと、ふざけないでよ！　そんなに長い時間こんなところに閉じ込められなくちゃいけないの？」

「それ以前に、体力がまず持たないだろ」

口々にあがる僕達に疑問に対し、しかし仮面の男性はいてに調子で答えるだけだ。

「確かに、十二時間連続では皆さんも疲労が溜まってしまうでしょう。ですから、途中に休憩時間も挟ませていただきます。十二サイクルの半分の六サイクル経過の時点で休憩のために十二時間を差し上げます。睡眠を取るなり、食事にするなりしていただいて結構です。十二の小部屋の中には冷蔵庫や冷房の設備もありますし、トイレやバスルーム、ベッドも完備しています。一日過ごすだけなら十分に足りるであろう食料と水も用意してあります」

「そういう問題かよ……」

「でもまぁ、野宿よりは大分マシか」

「ていうかこれって、監禁になるんじゃないの……？」

「なるんじゃないの、じゃなく、もう立派な事件だよ。全然実感沸かないけどな」

僕達の溜め息を見送り、仮面の男性は続ける。

「まず六サイクルのゲーム。そして十二時間の休憩。そしてまた六

サイクルのゲーム。この手順で、ちょうど二十四時間。これがクロックゲームの所要時間でもあり、同時に皆さんに与えられた制限時間でもあります」
「……制限時間？」
「どういうこと？」
「これはゲームですから、当然勝敗の結果が必要となります。まず、皆さんの勝利条件を説明しましょう。一つ、休憩時間を含めたゲーム終了までの時間を、無事に過ごしきること。一つ、ゲームに仕掛けられたトリックを見破ること」
「トリック？」
「そうです。このクロックゲームには、あるトリックが仕掛けられています。それを見つけることでも、皆さんの勝利条件になります。この二つが、皆さんの勝利条件となります」
そう言われたものの、僕達は呆然としていた。
一体何がトリックなのか、それすらも見当がつかないままだ。
「では次に、皆さんの敗北条件について説明しましょう。こちらも至って簡単です。一つ、ルールを破らないこと」
まぁ、それは当然といえば当然だろう。
ゲームである以上、ルールがなければ成立しないのだから。
「そして、もう一つ」
このとき僕達は、案外楽観的に考えていたのかもしれない。
確かに二十四時間の間拘束されるのは迷惑この上ないことだけど、悪く考えなければ一泊だけこの場で過ごす、そう考えられなくもなかったからだ。
加えて、勝利条件として提示された条件の片方が、かなり緩い条件だっからかだ。
ゲーム終了までを無事に過ごすこと。
これはまず時間さえかければ楽にクリアできるハードルだった。
しかし、直後にとんでもないことが起こる。
もう一つの敗北条件、それは……。

「――ゲーム開始から二十四時間が経過した時点でこの館から脱出できていない場合、皆さんの敗北となります」

「……え？」

「な、何だよそれ」

「……どういう、こと？　だって、さっき……」

「そ、そうだよ。さっき言ってたじゃないか」

「ゲーム終了の時点で無事なら、俺達の勝ちじゃないのか？」

それはどう聞いたところで、矛盾以外の何ものでもなかった。

勝利条件と敗北条件が、見事なまでに一致してしまっている。

そんなゲームをクリアすることなど、できるのだろうか？

「おい、ちゃんと説明しろよ！」

「そうよ。こんなのおかしいじゃない」

「ゲームどころか、ルールの時点で成り立ってないじゃないか」

「ですから、先ほど申したではありませんか。このゲームには、トリックが仕掛けられている、と」

「……」

その一言で、僕達は言葉を失った。

「じゃあ、もしかして……」

今、この時点でもう、何かしらのトリックが仕掛けられてしまっているのだろうか？

それとも、この仮面の男性の言葉そのものがすでに、トリックなのだろうか？

「……さて、それではゲームの報酬について説明しましょう」

僕達のことなど見向きもせずに、仮面の男性は続ける。

「まず、皆さんが勝利した場合。これは説明の必要もないとは思いますが、一応言っておきましょう。このゲームのクリア報酬は、皆さんを無事に館の外へと送り出し、崖向こうまで送り届けること。

言い換えるのなら、この館から脱出する権利こそが報酬なのです」
正直、そんな報酬どうのこうのという話はどうでもよかった。
それよりも僕達は、もう片方のことが気になって仕方がなかったのだから。
「そして当然、負けた場合のペナルティ……罰ゲームも用意させて頂いてます。罰ゲームは……」
その次に発せられる言葉に、皆の神経は集中していた。
いつの間にか空気は緊張し、張り詰めたものになっていた。
冷房も効いていないのに、こんなにも寒気がするなんて……。
そして、罰ゲームが告げられる。

「――この館もろとも、炎の中で死んでいただきます」

「……っ！」
「な……」
「炎って、そんな……」
「館に、火をつけるってこと……？」
「ふざけるな！　何でこんなゲームに命をかけなくちゃいけないんだ」
「主だか何だか知らないけど、頭おかしいんじゃないのその人？」
「……信吾」
「……」
僕もこの仮面の男性が、そして館の主とやらが何を考えているのかさっぱり分からなかった。
こんな命がけのゲームをして、一体何があるというのだ？
「皆、こんなの相手にすることないよ。帰ろう」
「ああ、同感だ。これだったら林の中を突っ切ったほうがマシだぜ」
「でも、扉はもう開かないんじゃ……」
「知るかよ。ぶっ壊していけばいいんだよ、あんなもん。どうせ燃やそうとしてる館だぜ？　扉一枚惜しくもないだろ」

「残念ですが、そういうわけにもまいりません」
そう言いながら仮面の男性は、胸ポケットの中から何か小型の装置のようなものを取り出し、僕達に見せた。
「私がこのスイッチを押せば、館の中数十ヶ所に仕掛けておいた爆弾が作動し、三十秒後に一斉に爆発します。無論、館は粉々に吹き飛ぶでしょうし、皆さんもまず生き残ることはできないでしょう。特殊な爆弾で、威力と被害の大半が内側に向かう代物ですから」
「何で、そんなことまで……」
「……っ、けど、そんなことしたらアンタだって巻き込まれて死んじまうだろ」
「そ、そうだよ。オジサンだって、死にたいわけじゃないんで……」
そう言いかけたところで、しかし言葉は途切れる。
仮面越しの不気味さとはまた別の、見えない素顔から伝わる妙な雰囲気。
体温のない呼吸を繰り返しているような、そんな空気がそれだけで告げていた。
この男性は、命に対して微塵の重さを感じてはいない。
「……」
その見えない迫力だけで、僕達は気圧された。
腕力や体力はどうか知らないが、僕達は全員精神力でこの男性に屈服させられていた。
「……詳しいルールや条件などについては、こちらの紙に書いてあります。人数分用意してありますので、お一人ずつどうぞ」
手渡されるそれを、僕達は力なく受け取った。
「何か質問があればどうぞ」
誰も、何も聞かなかった。
「分かりました。質問は休憩時間の十二時間の間にも再度受け付けますので、ゲーム中に疑問が浮かんだりしたときはその時間にて質問なさってください。答えられる範囲でお答えいたします。それで

は……」

仮面の男性は腕時計に目を落とす。

「現在、午後五時三十二分。午後六時ちょうどより、ゲームを開始します。それまではどうぞ、ごゆっくり」

stage5：ゲーム開始

そして僕達は、参加することになった。
得体の知れないこの、クロックゲームという不気味なゲームに……。

ゲーム開始二十分前、十二番の部屋に僕達は集合していた。
「……結局、これから二十四時間の間軟禁されるようなもんか……」
「ワケわかんねーよな、本当に」
「呑気なこと言ってる場合じゃないでしょ？　それまでにどうにかしないと、私達この館ごと焼き殺されちゃうのよ？」
「そ、そうだよ。早く、何とかしないと……」
「……でも、どうすればいいんだろ」
「あの仮面男が言ってただろ。俺達に勝利条件ってのをよ」
「でもあれ、絶対矛盾してるよ。どう考えたってさ」
「……確かになぁ……」
僕達は配られた紙を開き、そこに記されたこのゲームのルールを確認する。
その中の勝利条件の一つに、こうある。

――ゲーム終了の時点で、無事に生存していること。

その中の敗北条件の一つに、こうある。

――二十四時間経過の時点で、館から脱出できていないこと。

この二つの相反する条件が、このゲームの仕組みをメチャクチャにしているんだ。

このままだと、僕達はいずれ勝利条件と敗北条件を同時に満たしてしまうことになる。
そうなってしまえば、館から出る権利を得ると同時に、館そのものが炎上してしまうことになる。
ギリギリでも逃げ延びるチャンスはあるのかもしれないけど、ぶっつけ本番でそれを試すにはあまりにも分の悪い賭けだ。
となると、残る手段は自動的にたった一つしかなくなってしまう。
僕達に与えられた、もう一つの勝利条件、それが……。
「……トリックを、見破ること」
ふと僕が呟くと、皆の視線が集中する。
「もう片方の勝利条件があてにならないんだから、こっちを優先したほうがいいんじゃないかな。多分、そのためにもこのゲームには沢山の時間が用意されてるんだと思う」
「ようするに、考えろってことか。与えられた二十四時間で、そのトリックってやつを」
「でも、トリックって言ったって……」
「……そうだな。今はまだ、ゲームすら始まってないからな。もしもゲームの内容や動きの中に、何かしらに仕掛けがあるとすれば、それは今の段階じゃ何も分からない」
「ゲーム中も気を抜かずに考えろってことなんだと思うよ。ルールの通りだと、移動は一人一時間つきたったの一度。一時間のうちの五十五分は、一人で過ごすことになるんだからね」
「……とにかく、まずやってみないと何も分かりそうにないな」
「そんな楽観的な……」
「けど、焦っても仕方ないだろ。二十四時間しかないんじゃない。まだ二十四時間あるんだ。前向きに考えようぜ」
「……そうね。ジタバタしたって、もう始まっちゃうわけだし」
「……分かったわよ。腹くくればいいんでしょ、もう……」
そんな会話を聞きながらも、僕はジッとルールの書かれた紙に目を落としていた。

確かに、ゲームそのものが始まっていない今、空論をいくつ述べてもキリがないのは当然だ。
しかし……。
何か、違和感を感じるような気がする。
もっとこう、根本的な部分で何かがおかしいような……。
「信吾、どうかしたか？」
「……あ、ううん、何でもないよ」
でも今はまだ、それを言うべきじゃない。
余計な混乱を与えるのは避けたほうがいいだろう。

ガチャリと、ふいに扉が開いた。
するとそこには、あの仮面の男性が立っていた。
「あと五分でゲーム開始となります。皆さん、まずはこのクジを引いてください。それぞれの部屋の番号を決めるものです」
仮面の男性は手に持った小さな箱を差し出し、そこから一枚ずつクジを引くように促した。
ここでしぶっても始まらないので、僕達はそれぞれにクジを引いていく。
「全員行き渡ったようですね。それぞれの紙に書かれた番号が、開始時の部屋割りになります」
「……おい、誰かペン持ってないか？」
「私、持ってるけど。でも、どうするの？」
「……根拠があるわけじゃないけど、念のためにな」
ペンを受け取ると、浩二は自分の引いたクジの紙に自分の名前を書き出した。
「トリックってやつが、何に仕掛けれるか分からないんだ。こういう些細なことでも、気を回しておかないとな」
「……そうね。私も自分の名前を書いておくわ。このクジに仕掛けがされてる可能性だって、ゼロじゃないんだもの」
そして僕達は全員、それぞれのクジに名前を書き連ねていった。

「別に構わないよな？」
「ええ。ルール上は問題ありません」
そして全員がクジに名前を書き終える。
初期の部屋割りは、以下のようになった。

一番……橘康祐（たちばな こうすけ）
二番……久保雅（くぼ みやび）
三番……高居信吾（たかい しんご）
四番……栢山縁（かやま ゆかり）
五番……松山浩二（まつやま こうじ）
六番……要こだま（かなめ　こだま）
七番……奥村大輝（おくむら たいき）
八番……瀬川志保（せがわ しほ）
九番……佐藤秦（さとう しん）
十番……三上慶子（みかみ けいこ）
十一番……進藤豊（しんどう ゆたか）
十二番……木村夏樹（きむら なつき）

「では移動する前に、もう一つ。皆さんが身に着けている携帯電話や時計など、時間が分かる計器類はゲーム終了までこちらで預からせて頂きます。これはあくまでも時間を気にせずゲームに集中していただくための配慮なので、他意はありません。ゲーム終了時には必ずお返しいたします」
言われたとおり、僕達は所持品のそれらを仮面の男性へと渡す。
「でも、それじゃ五分ごとに移動するときとか、分からないんじゃ……」
「その点はご安心ください。ゲーム開始から五分ごとに、鐘の音が鳴るようになっています。音は全部の部屋のスピーカーを通してしっかりと聞こえるようになっていますので、それを合図にしてください。なお、一時間経過ごとにはなる鐘の数が三回になりますので、

それも目安にしていただければよろしいかと」
「用意がいいわね、全く……」
「では、確かにお預かりしました。それでは皆さん部屋の移動をお願いします」
夏樹以外の僕達十一人は、それぞれに割り当てられた部屋へと移動する。
「そうそう、申し遅れましたが」
その間際に、仮面の男性が振り返って今更に言った。
「私、このゲームの案内役を勤めさせていただきます、時任と申します。そう呼んで下されば結構ですので、何かあればどうぞ」
そんな言葉を半分ほど聞き流しながら、僕達はそれぞれの部屋につき、扉を閉めた。
もう間もなく、ゲームが始まる。
「……あれ？」
一番の部屋に割り当てられた康祐が部屋の扉を閉めようとしたら、そこには時任が立っていた。
「最初の合図だけは、私の口頭でさえていただきます。合図と同時に、すぐに二番の部屋へと向かってください」
「……」
康祐は答えず、小さく頷くだけしておいた。
「……それでは」
時任が自分の腕時計に目を落とす。
秒針が時を刻み、やがて夕方の六時を示した。

「――ゲーム、開始です」

まず、康祐は室内同士を繋ぐ扉を開け、隣の二番の部屋へ入った。
その様子を見送り、扉の前の時任もその場から立ち去る。

二番の部屋へくる。
「ふぅ……」
「どうかしたの？」
溜め息を吐き出す康祐に、雅が聞いた。
「あの時任って人、掴み所のないなて思ってさ」
「っていうか、不気味だよあの仮面。外せばいいのにさ」
「まぁ、声の感じはまだ若いみたいだけどな」
康祐は部屋の真ん中に座り、ゴロンと仰向けになった。
「……橘はさ」
「ん？」
「どう思う？　このゲーム」
「どうって、そりゃ……迷惑な話だとは思うよ。いきなり迷い込んで、逃げたら殺すみたいに脅されてさ」
「うん……」
「……けどまぁ」
「けど、何？」
「……すっげー不謹慎なんだけどさ。正直ちょっとだけ、ワクワクしてる」
「……」
「負けたら死ぬかもしれない。そんなヤバイ内容なのにな。自分でも不思議だけど」
「……やっぱ、そうなのかな」
「何がだ？」
「……正直言うとね、私もふざけるなって思ったよ。でも、ゲームのルールとかそういうの色々聞いてるうちに……ちょっとだけ、面白そうかもって思っちゃってさ」
「……案外、俺達だけじゃないかもしれないぜ？」
「え？」
「皆が案外素直にこのゲームに参加したなって思ってたけど、もしかしたら皆、俺達と似たり寄ったりなところがあったのかもしれな

いなってことだよ。このゲームに対する、好奇心みたいなのがな」
「……そうかも、ね」
「……でもまぁ、トリック云々に関してはさっぱりだけどな。全然見当もつかない」
「だって、まだ始まったばかりだもの。そんな簡単に見破られたら、出題側もお手上げでしょ？」
「ま、そりゃそうだな」
アハハと、二人は小さく笑い合う。
極限に追い込まれているというのに、どういうわけか興奮しているみたいだった。
そして、しばらくすると。

――ゴーン……。

まるで除夜の鐘を思わせるような、そんな鐘の音が鳴り響いた。
まず、五分経過である。
「それじゃ、私もいってくるね」
「ああ。しっかりな」
雅は立ち、部屋同士を繋ぐ扉を抜けて三番の部屋へと向かう。
三番の部屋で待っていた僕は、扉が開く音に気づいた。
「や」
軽く手を上げてそう言う雅に、僕も目線で答える。
「とりあえず、五分だね」
「うん、まずはね。ところでさ、高居はどう思う？　このゲームについて」
「……どうって？」
「実はちょっと、橘と話してたんだけどね」
雅は康祐と話したことを僕に話す。
「というわけだったんだけど、高居はどうなのかなって思ってさ」
「……うん、まぁ……似たり寄ったりだと思うよ、僕も。確かに面

倒なことに巻き込まれたって思ってる。ゲームの最後に死んじゃうかもしれないって思うと、怖くもなるよ。でも確かに、どこかでそういうワクワクしたような気分があったのも本当だから」
「そっか。やっぱ、皆そうなのかなぁ」
「案外、そうかもしれないね。でも……」
「でも？」
「……志保は、こういうの苦手そうかな。昔から、お化け屋敷とかも大の苦手だったし」
「まぁ、あの子の怖がりは極端だからね……」
「うん……」
「心配？」
「え？　そりゃまぁ、ね。僕達幼馴染で、ずっと一緒だったから」
「ふぅん……」
「どうかした？」
「いやいや、こっちの話」
なるほどなるほどと、雅は何か納得したような様子で雅はニヤついていた。
僕にはその笑みの理由が、よく分からなかった。

――ゴーン……。

そして、二度目の鐘が鳴る。
「それじゃ、僕も行くね」
「うん。またあとでね」
扉を開け、隣の四番の部屋に向かう。
開始十分、今はまだなにもおかしなことはない。
ただ、僕の頭には嫌なイメージが漂い始めていた。
それは、あの処理条件の中のこの一文。

――ゲーム終了時、無事に生存していること。

……無事に、生存。
なぜ、こんなことが条件に加わっている？
それは、つまり……。
ゲームの最中で、命を落とす危険性があるかもしれないからじゃないのか？
そんな、根拠もない不安が消し去れないでいた。
考えすぎであればそれでいい。
けど、もしも、万が一でも……。
「……」
今はまだ、答えは出せそうになかった。
扉を開ける。
四番の部屋へ、僕は足を踏み入れた。

ｓｔａｇｅ６：一時間経過

三番の部屋を出て、四番の部屋へ。
そこでは縁が座っていた。
「あ、高居君……」
「どうかした？」
「ううん、どうってわけでもないんだけど……」
そう言うと、縁はそのまま口を閉ざしてしまう。
僕は隣に座り、そんな縁の様子を窺った。
「……私達、どうなるのかなぁ」
「……どうだろう。まだ、分からないことだらけだしね」
「本当に、ゲームクリアできなかったら死んじゃうのかな」
「……それは困るけど……」
「だよね……」
「……でも、ゲームって言ったからには、僕達にもチャンスはあるわけだから。ただ、今の段階じゃそのトリックっていうのが一体どんなものなのか、見当もつかないけど」
「トリック、かぁ……考えても分からないよ。私、バカだから」
「そんなことないって。それに、まだ皆何も分かってないのは一緒だよ」
「そう、だけど……」
縁は溜め息をついて、膝を抱えてしまう。
気持ちは分かる。
僕だって、今はまだ時間に余裕があるからこうしていられるけど、残り一時間とかの切羽詰った状況に追い込まれたら、きっと落ち着いてなんかいられないだろう。
それもきっと、皆同じはずだ。
だから、少しでも考えなくちゃいけない。
このゲームのどこかに仕掛けられているという、トリックを見つ

けるためにも。
とはいっても、やはり今の段階では手がかりが少なすぎる。
一人で考えるよりも大勢で意見を出し合ったほうがきっと得策なのだけど、ゲーム中はそういう相談ごともできない。
せいぜい今のような、部屋移動直後のわずかな時間で二人で話し合うことが限界だ。
次に全員が顔を合わせることが出来るのは、六時間後の夜の十二時。
ちょうど日付が変わり、十二時間の休憩を与えられるときだ。
その頃になれば皆、きっとクタクタに疲れているだろう。
当然眠気も出てくるだろうし、休息も必要になってくる。
そういう時間を割きながら、僕達は考えなくてはいけない。
最終的に生き延びるためにも。

――ゴーン……。

そして再び鐘の音が鳴る。
「それじゃ、私も行くね」
「うん。あ、縁」
「何？」
「いい加減なことかもしれないけどさ、まだ時間はあるんだし……あんまり、悪いように考えないほうがいいよ。皆一緒なんだからさ」
「……うん。ありがと」
そう答えると縁は少しだけ笑い、扉を開けて五番の部屋へと入っていった。
四番の部屋に残った僕は、深く息を吐き出し、壁に背を預けた。
ああは言ったものの、僕も結局は何も分からないままだった。
ゲーム開始からまだわずかとはいえ、時間は確実に消費されていき、決して戻ることはない。
二十四時間など、それこそあっという間に過ぎていくものだと僕

達は知っている。
焦らずにいられるはずがない。
考えるしかないんだ。
時間は限られているのだから。
何か、トリックにたどり着くべきヒントがあるはず。
今手元にある情報からでも、何か分かるかもしれない。
「……そうだ、さっきもらったあの紙」
僕は折りたたんでポケットの中にしまいこんだそれを取り出す。
クロックゲームのルールが書かれた一枚の紙。
もしかしたら、この中に何かしらのヒントが隠されているかもしれない。
なぜなら、現時点で僕達が考えるための判断材料になるものはこれしかないからだ。
なら、そこに何かがある可能性は少なくないはず。
答えがそのまま書かれていることこそ期待できなくても、手がかりくらいなら……。
「……でも、一体このルールのどこに……」
紙を床の上に広げ、何度も読み直しながら僕は考える。
まず、基本的な動き方の説明。

五分ごとに各部屋を一つずつ移動。
移動する人物は常に一人。
十二人がそれぞれ一回の移動を終えると一時間が経過し、初期配置の部屋から一つずつずれた部屋に移動していることになる。
この一時間の動きを一サイクルとし、六サイクル繰り返すことで前半が終了。
前半終了後、休息時間として十二時間が与えられる。
居遅く時間終了後、後半が開始される。
合計十二サクイル終了でゲーム終了。

そして、勝利条件と敗北条件の説明。

勝利条件：ゲーム終了の時点で生存していること、あるいはトリックを見破っていること。

敗北条件：二十四時間経過の時点で、館から脱出できていないこと。

勝利条件を満たした場合の報酬は、館の外へと出る権利。

つまり、勝利条件とは最終的に館の外に出ることだ。

しかし、敗北条件はそれを否定するようなものになっている。

これでは同時に条件を満たしたことになってしまい、僕達は館から出る権利を得ると同時に敗北してしまうことになる。

そして、敗北はこの館と共に炎上すること……つまり、死を意味する。

ということは、僕達が無事にこの館を脱出するためには、休息として与えられる十二時間が終了するまでにトリックを見つけ、そしてそれが正しい答えでなくてはいけない。

この幾重にも置かれたハードルを、果たしてクリアできるのだろうか。

……いや、できるのだろうかじゃ済まされない。

「……クリアするんだ、絶対に。こんなところで、死んでたまるか……！」

誰だって死ぬのは怖い。

もちろん僕だって同じだ。

そしてそれ以上に、僕は皆にも死んでほしくない。

大切な友達なんだ。

この先、進学とかできっと皆バラバラの道を歩くことになるだろう。

その前に一つでもいい思い出を作ろうと、こうしてやってきた小旅行。

その中で誰か一人でも不幸なことになってしまうなんて、僕は考えたくない。
だから、考えろ。
時間はまだ十分に残されている。
二十四時間しかないんじゃない。
まだ、二十四時間あるんだ。
だったら、一分一秒でも思考を停止させるな。
あらゆる可能性を考えろ。
どんな些細なことでもいい、見つけるんだ。
きっとある。
目には見えない、見落としてしまいがちな何かが……。

「それじゃ、行くわ」
「うん、気をつけてね」
「大丈夫だって。さすがにあの時任ってのも、部屋の扉破って襲ってきたりはしないだろ」
「あ、危ないこと言わないでよ……」
「悪い悪い」
そう笑いながら、浩二は六番の部屋へ。

時間だけが流れていく。
無造作に、そして二度と還ることはなく。
そしてまた一つ、また一つと、響く鐘の音。

「あ、行かないと」
「ああ。大丈夫だとは思うけど、一応気をつけろよ」
「……だといいんだけど」
少々怯えつつも、こだまが七番の部屋へ移動。

「何かあったら大声出せよ。扉ぶち破ってでも皆くるだろ」
「うん、分かった」

誰一人として、落ち着いていられるはずもなく。
考えなくてはならないことよりも、目先の不安ばかりが優先して。
今はまだ遠い死の恐怖が、しかし刻一刻と近づいてくる感覚。
まるで、聞こえない足音が常に背中に張り付いているようで。
それは時として、この世のものとは思えない悪寒を走らせる。

「さて、行ってくるわ」
「うん、気をつけてね」
「平気平気」
大輝が八番の部屋へと向かう。

ゲーム開始からまだ一時間も経っていない。
が、この時点で少しずつ平静さが失われてくることになる。
その理由は、ゲーム開始前に時計や携帯など、時間の分かるものを手放しているということ。
時任はゲームに集中してもらうためと言い、皆それを承諾こそしたものの、いざゲームをやってみると、時間の経過を知らせてくれるのはこの鐘の音だけである。
鐘の音は五分ごとに鳴り、一時間が経過したときは三度続けて鳴らされる。
それだけが唯一、時間経過を知るための手段であり、その他には部屋のどこにも時計などの時間が分かるものは設置されていなかった。
テレビがないのも、番組によっては画面の中に現在の時刻が表示されてしまうからだろう。
何と言うか、本当に徹底している。

室内には監視するためのようなカメラなどは見受けられないが、それでもどこかから見られているような視線を感じることがある。
そういうのは大体が気のせいだと分かってはいるが、恐怖を覚えるなというのは無理のある話だ。

「……行くね」
「ああ。そんなに心配すんなって。部屋が離れてはいるけど、皆何かあったらすぐにくるって」
「……うん」
頷きこそするが、志保の中から不安は抜けない。
最初から何かおかしいと、志保はそう感じていた。
それは、この館に入る前。
僕と康祐が、二階の部屋の開いた窓を見つける、それよりも前。
あの、洞窟の中から繋がっていた狭い通路を歩いていた、その頃から。
「……」
ずっと、何かが離れない。
それは恐怖とか不安とか、そういう感覚のようなものではなくて。
もっと肌で直接感じ取ることが出来るような、嫌な空気。
しかし、それが何であるかは志保本人にもやはり分からなく、結局のところどうしようもないだけ。
誰かに相談しようにも、言葉にうまくできないことは相談のしようがない。
あえて言えばそれは……嫌な感じがする。
そうとしか表現できないものだった。

「よし、行くかな」
「……気をつけて」
「ああ、分かってるよ」
秦が十番の部屋へと移動する。

一サイクルが終わるまで、残された移動はあと三回。
何事もなく、鐘の音だけが規則的に鳴り続ける。

「行ってくるわ」
「おう、何かあったら呼べよ」
「ん、ありがと」
慶子が十一番の部屋へ。

「これ、待ってるほうが疲れるな」
「全くよ。変なルールなんだから」
「ま、行ってくるわ。んじゃまたな」
「ええ」
豊が十二番の部屋へと向かい……。

――ゴーン、ゴーン、ゴーン……。

三度続いて鳴り響いた鐘の音。
「ふぅ。やっとこれで一時間？　もう疲れてきちゃったよ……」
「ただ待ってるだけだからな。まぁ、色々考えなくちゃいけないわけだけど」
「ま、とりあえず移動するね」
「ああ。またあとで」
夏樹が一番の部屋へ移り、ようやく一時間が経過する。
今のところ、変化らしい変化はない。
十二人それぞれが、皆そう感じ取っていた。
しかし別の意味では、もう一時間経過してしまったのだ。
タイムリミットはあと二十三時間。
今の僕達には、仕掛けられているトリックが何であるかという以前に、どこに仕掛けられているのか、その見当さえついていなかっ

た。

コンコンと、ふいに扉がノックされる。

「……はい？」

二番の部屋にいた康祐は、とりあえずそう答える。

すると、ガチャリと扉を押し開け、時任が姿を見せた。

「……何ですか？」

「今ちょうど一サイクルが終わって、部屋が一つずつずれたところです。次に一番の部屋からまた移動が始まってしまうと、ずれ方がおかしくなってしまうのですよ。ですので、また私が合図させていただきます」

確かに、このままた一番の部屋から開始すると、最初に十二番の部屋にいた夏樹は連続で移動することになってしまう。

ということは、康祐は一時間ごとにこうやって時任と顔を合わせなくてはいけない。

もちろん嫌なことだったが、やむをえないのでこの場は黙っておく。

そんな態度など目もくれずに、時任は腕時計に目を落としていた。

「……では」

康祐は顔を上げる。

――ゴーン、ゴーン、ゴーン……。

「二週目、開始です」

時任はそれだけ告げて、扉を閉めた。

クロックゲーム二週目も、こうして静かに始まった。

stage7：夜

「……」

誰からともなく、無言でいることは多くなっていた。

無理もない、こんな単調で面白みのカケラもないようなゲーム……しかも延々と部屋の移動と待機を繰り返すだけの時間の流れの中では、肉体的な疲労ももちろんだが精神的にもきつい状態になってくるのは明らかだろう。

半ば機械的に同じ動作を繰り返すだけ。

耳に響く鐘の音も、途中から何度目のものか分からなくなってきている。

唯一分かるのは、三度続けてなる鐘の音が一時間の区切りを報せてくれるということだけだった。

そして。

――ゴーン、ゴーン、ゴーン……。

これがちょうど、六度目の響きだった。

ゲーム開始から六時間が経過し、ようやく前半戦が終了したところだ。

「……休憩、か」

僕は部屋の中で一人呟いた。

さすがに疲れは顔にも出ていそうだった。

まず眠気が強い。

三時間が過ぎた頃からうとうとし始めて、五分刻みの鐘の音に毎回起こされていたくらいだ。

とりあえず、一度皆で集まったほうがいいだろう。

僕は眠気を押し殺しながら立ち上がる。

ちょうどそのときだった。

「――皆さん、まずは前半戦お疲れ様でした」

その声はあの、時任と名乗った男性のものだった。

どうやらこの声は、部屋の中に備え付けられたスピーカーの向こうから聞こえているらしい。

「ただいまから十二時間を休憩時間とし、後半戦の開始は正午ちょうどからとします。それまでの間は自由ですので、食事なり睡眠なり、各自部屋でご自由にお過ごしください。一箇所に集まったりしてもらっても構いません。何かあれば私は部屋の外、中央におりますのでお気軽にどうぞ」

そう言い終えると、ブツッという放送が途切れる音が室内にこだました。

ひとまず僕は、両隣の部屋の扉をノックし、押し開けてみる。

「あ……」

と、隣の八番の部屋には、すでに何人かのメンバーが集まってきていた。

「高居も無事か」

「うん、とりあえずは」

それぞれに腰を下ろしたり、ベッドに座ったりしている様子を見て、僕も床に座る。

直後に、今度は僕がいた吸盤の部屋の向こうの扉が開き、残ったメンバーがやってきた。

六時間ぶりに十二人揃って顔を会わせることとなったが、誰の顔にもやはり疲労の色が見て取れた。

「とりあえず、皆無事みたいね」

全員が互いにそれを確認して、僕達は安堵の息をついた。

「けど、正直疲れた。時間も時間だし、眠いやつもいるんじゃない

か？」
時計はないが、ゲームの進行具合と開始時間から考えれば、現在の時刻は日付が変わった夜中の十二時過ぎのはず。
ざっと顔を見るだけでも、疲れと眠気は明らかだ。
「本当なら悠長に休んでる暇はないのだけれど……」
「けど、このまま話し合いなんかしてもどうにもならないだろ。まずは少し寝るなり食うなりして、体を休ませないと」
「そうしてくれると、ありがたいな……」
「ああ。悪いけど俺も、もう限界だ……」
昼間歩き詰めだったことも後押ししているのだろう。
皆の疲労はすでに限界で、こうしている今もうとうとして目を閉じかけている。
色々と話すことはあったけど、確かにまずは休息が必要だ。
その後僕達は少しだけ話をして、そのあと四つの部屋に分かれて休むことにした。
使う部屋は七から十までの四つの部屋。
各部屋に三人ずつが一緒にいることにした。
外側の七番と十番の部屋に、男子が三人ずつ。
間の八番と吸盤の部屋には、それぞれ女子が三人ずつ配置された。
僕は七番の部屋に、豊、そして秦とともに過ごすことになった。

「それにしても……」
ボスンと、ベッドに倒れこみながら秦はぼやいた。
「信吾、豊。お前ら何か分かったか？　このゲームのトリックとかについてさ」
「いや、さっぱり」
豊は即答する。
「色々考えては見たけど、考えると逆にこんがらがってくる感じだ。それに今は、疲れてそれどころじゃない」
「……だよなぁ」

豊は仰向けに寝転がり、続ける。
「信吾、お前は？」
「え？　あ、うん……まぁ……」
「……何か、気になることがあるのか？」
隣に座っている秦が聞いた。
「……まぁ、あるにはあるんだけど……」
「分かったのか？　あの、トリックが」
「ううん、そこまでは分からない。何か分かったっていうより、分からないことが増えたっていうのかな……」
それはつまり、何かしら疑問を覚えることがあるということだ。
けどそれにも確信めいたものは何一つなく、そんなことを言いふらせば逆に混乱を招いてしまうんじゃないかと僕は不安だった。
「増えたって……それじゃ意味ねーじゃん」
「……そうかも」
秦はハァと溜め息を吐き出したが、豊はそうじゃないとつけ加える。
「信吾は、疑問に思ってることがあるんだろ。だから、もしかしたらその疑問の答えがトリックに繋がるかもしれない。そう考えてるんじゃないか？」
「……その可能性もあるかもしれないけど、今はまだ何とも言えない。それに、ヘタな発言で混乱させたくないから」
「……で、何なんだ？　その疑問ってのはさ」
「それは……」
言っていいものなのだろうかと、僕は悩んだ。
何の根拠もなしに、希望を与えるような言葉を口にしていいのだろうか。
結果として、それが全くの見当はずれだったら？
そのときの落胆振りは計り知れないものになるだろう。
「……ごめん、今はまだ軽々しくは言えない。ひとまず休んで、起

きてまた皆が揃ったときに言うよ」
「……分かった。それじゃ、もう寝るか……っと、その前に俺はシャワーでも浴びてくるかな」
秦は部屋の隅にある脱衣所に向かう。
「信吾、何か飲むか？」
豊は備え付けの冷蔵庫を開け、聞いた。
中には色々な飲み物が入っているらしく、僕はその中からスポーツドリンクを一本もらう。
他にも色々食料などが入っているようだ。
サンドイッチやサラダも見えるが、生ものだけに賞味期限が気になるところだ。
まさかとは思ったが、薬物の混入なども考えられないわけではない。
とも思ったが、ここにきてそんな小細工を仕掛ける理由も見当たらないので、僕と豊はしばらく悩んだ末に、冷蔵庫の中の食品を口に運び始めた。
その後、秦がシャワーを浴び終えて食事を取り、僕と豊が交代でシャワーを浴び、それぞれが寝る準備をした。
どうやら休憩時間中には、ゲーム中のあの鐘の音は鳴らないようになっているらしい。
まぁ、さすがに寝ている間にも五分おきに鐘の音が響いたんじゃ休憩になりゃしないだろう。
一つのベッドに男三人が潜り込むわけにもいかないので、僕と豊はクローゼットの中から予備の布団を引っ張り出し、その上に横になった。
電気を消し、それぞれに横になる。
間もなくして、部屋には二人分の静かな寝息が響き始めた。
僕は一人、色のない天井を見上げながら、まだ眠ることができないでいた。
すっかり目が冴えてしまっている。

疲れはどっぷりと溜まっているはずなのに。
「……」
こんな風にのんびりと休んでいていいのだろうか。
タイムリミットは確実になくなっているというのに……。

……だめだ。
時間の感覚がおかしくなっている。
ゲーム中は鐘の音が時間経過を物語ってくれていたけど、今ではそれすらもない。
身の回りの時計や時間が分かるものも予め回収されているし、時間を確認する手段がない。
これじゃあこの仮眠を終えた時点で、あとどれだけの休憩時間が残されているのかすら分かりはしないだろう。
精神的にどんどんと追い詰められていくのが分かる。
僕は……いや、僕達はすでに狂い始めているのかもしれない。
時の流れが体感できない、この閉じられた小さな空間で。
何も分からずに、謎めいたゲームにただ集中する。
一種の集団催眠のようなものに似ているかもしれない。
とはいえ、たかがゲームだとバカにすることもできない。
何しろ、このゲームには僕達の命がかかっているのだから。
勝てば無事に館を脱出、負ければ館ごと炎に包まれて死を待つばかり。
今にして思えば、ずいぶんと自分勝手なルールだ。
負ければ死という、逃れられないほど重いペナルティがあるにもかかわらず、勝ってもそれ相当の見返りがない。
確かに、命の保障という意味ではこの上ない見返りにはなるのかもしれない。
が、この手のものは例えば、巨万の富であるとか、嘘でも願いを一つかなえてやるとか、そういうものが定番のような気もする。
その代わりに、敗北は死という大きすぎるペナルティが課せられ

るわけで。
……うまくは言えないのだけど。
まるでこのゲームを考案した館の主という人物は、最初からゲームの結果を見通しているような気がする。
それは勝利を確信し、僕達が迷い戸惑う様を見て笑みを浮かべているとか、そういう意味ではなく。
まるで正反対なのだ。

――こんなゲーム、勝てて当たり前だと言わんばかりに……。

そうでなくては説明がつかない。
生還か死かという二択。
生と死は確かに対極だ。
それは一見、天秤がつりあっているかのようにも思える。
……だが。
本当に、そうなのだろうか……？
この状況に当てはめれば、何もおかしくはないようにも思える。
事実僕達は、死にたくないからこそゲームに参加し、勝利を目指しているのだから。
いや、安直な考えはよせ。
どんなギャンブルだって、親と子では親のほうが有利になる。
カードを配るのはいつだって親側だ。
僕達はただ、一見して公平に配られたであろうそれらのカードで手作りをしているに過ぎない。
例えその山札が予め、子には絶対に勝てないように細工されたものだとしても……。
「何か……」
僕は起き上がり、最初に配られたルールの書かれた紙を取り出す。
「何か、あるはずなんだ。このゲームに仕掛けられた、トリックが……」

書き連ねられるルールの一覧。
そこに矛盾はないか。
違和感はないか。
些細なことでいい。
服についた糸くずほどの、わずかな解れを見つけることができれば……。
どうやら、今夜は眠れそうにもない。

時任は円形の十二の部屋の外、最初にルールを説明したその場所に立っていた。
すでに夜は更け、日付が変わってから一時間が経とうとしている。
相変わらず白い仮面を貼り付けたまま、時任は最小限の動作で自分の腕時計に目を落とした。
アナログ式の時計、その秒針がチッチッと音を立て、一つまた一つと時を刻む。
「……あと、十一時間」
静かに呟き、時任は再び薄闇の中で立ち尽くした。

ａｔａｇｅ８：理由

目が覚める。
結局僕は途中で眠気に負けてしまい、眠ってしまっていたようだ。
薄暗い部屋の中。
今が夜中なのか、それともすでに朝日が昇っているのかさえも分からない。
が、隣ではまだ豊が静かに寝息を立てている。
ベッドの上の秦も同様だ。
時間の確認をしておきたいところだが、時間の分かるもの全てはゲーム参加前に取り上げられている。
ゲーム中は鐘の音が合図になってはいたが、休憩時間の今ではその音も聞こえないし、そんなのが鳴り響いていてはとても休憩どころの話ではなくなってしまうだろう。
となると、どうやら手段は一つしかなさそうだ。
「……っと」
僕は二人を起こさないようにそっと起き上がると、そのまま静かに部屋の外に通じる扉を押し開けた。
カチャリと、ドアノブを回すときの些細な音が響く。
念のため部屋の中を振り返るが、どうやらその音で起きた様子はない。
僕は静かに扉を閉める。
部屋の外、やたらと広く作られた空間の中央には、時任と名乗った仮面をつけた男性が立っていた。
もしかして、僕達が休んでいる間もずっとああして立ちっぱなしでいたのだろうか？
だとしたら相当体力に自身があるのか、あるいは精神力が強い人なのだろう。

と、そんなどうでもいいことを考えながら僕は歩を進める。
その足音に気づいてか、数歩ほど歩み寄ったところで時任は気づく。
顔色の見えない仮面に、僕はやはり少しだけ恐怖を覚えてしまう。
「どうかしましたか？」
抑揚のない声で時任は聞いてくる。
「……あの、今の時間って教えてもらえますか？」
僕が聞くと、時任は相変わらずその仮面をつけたまま、目線だけを手首に落とした。
「……現在、午前五時二十三分です。ゲームの後半戦は正午から開始ですので、まだ六時間半ほど余裕があります」
「……」
そのとき、どういうわけだろうか。
僕は時任のその態度に……何も不自然なことなどないその態度に、どうしても違和感を感じずにはいられなかった。
けど、その違和感の正体がなんであるかというところまでは考えが及ばす、ただ呆然と立ち尽くしてしまう。
「どうかしましたか？」
そんな僕の様子を不思議に思ったのだろう、時任が聞き返す。
「あ、いえ……どうも」
本来礼を言う必要などありもしないのだが、僕はとりあえずそう一言だけ返しておく。
僕はすぐにその場を引き返す。
ここにきた理由はもう果たした。
残された時間はおよそ六時間半。
球形として与えられた時間は、実質もう残り半分ほどしか残っていない。
皆はどうしているだろう。
もしかしたらもう誰か起き出しているかもしれない。

そうならば、多少無理にでも全員を起こして、話す時間を設けたほうがいいかもしれない。
寝る前に、誰一人としてトリックのことに関しては口を開かなかった。
それはつまり、まだ何の手がかりもないことを示している。
だとしたら時間が惜しい。
皆を起こしに行こう。

そしてそれから十五分後、多少無理もしたが、全員が起き、僕達は八番の部屋に集まっていた。
「……それじゃ、単刀直入に聞くけど」
雅が口火を切る。
「このゲームのトリック、分かった人はいる？」
しかしそれに対する返答は、やはり最初から決まっていた。
誰もが口を閉ざし、何も分からないということを意思表示する。
それっきり何も聞かない雅も、やはり何も分かっていなかったのだろう。
「手詰まり、か……」
小さな溜め息とともに、浩二が言う。
「答えが分かったとまではいかなくても、何か疑問に感じたこと、思ったこととかはない？　何でもいいから」
皆、隣り合う者同士で目配せするが、お互いに首を小さく横に振るばかり。
ある意味で、それは当然の結果だったのかもしれない。
もとよりあんな意味のない、単調すぎるゲームの中で冷静に思考することなどできるだろうか。
常に何かに集中しているわけでもなく、何もしない時間のほうが圧倒的に長いのだ。
物事を考えるどころか、体には余計な疲労ばかりが溜まっていくに決まっている。

落ち着けというのが無理な話なのだ。
それでも、こうして十二人揃っていられるだけまだマシと考えるべきかもしれない。
実際は皆、なけなしの神経をすり減らして必死に堪えているはずだ。
何かこう、些細なきっかけでその糸がプツリと切れ、爆発してしまう可能性は十分に考えられる。
そんな沈黙を破ったのは、こだまの一言だった。

「あのさ……」
「何？」
その声に、全員の視線が集中する。
「その……別に、解決のヒントにもならない、どうでもいいことなんだけどね」
こだまは一度全員の視線を見る。
妙に期待されているような気がして、それが話を切り出す機会を奪い去ろうとする。
「えっと……ホント、どうでもいいことなんだけど。このゲームってさ、要するに館から脱出しちゃえばいいんだよね？　最終的に」
「そりゃ、まぁ……」
極端に言ってしまえば、こだまの言うことはもっともだ。
「それで、思ったの。ちょっと、乱暴な話なんだけどね。例えば、例えばだよ？　私達全員で、あの時任って人に一斉に向かっていけば……」
「ちょ、ちょっと！　それってつまり、力ずくで脱出するってこと？」
思わず隣の縁が声を上げた。
「う、うん。大雑把に言えば、そうなんだけど……」
「……」
誰もが唖然としていた。

まさか、普段からおとなしい性格のこだまからそんな提案が飛び出すとは思わなかったのだろう。
事実、僕も驚きを隠せなかった。
「だ、だってさ、私達以外には、この館にはあの人しかいなさそうだし、これだけの人数なら、無理なことでもないんじゃないかなって思って……」
「それは、そうかもしれないけど……」
「……まぁ、考えなかったわけじゃないんだよな」
大輝が口を開く。
「そもそも、こっちは命がけのゲームを無理やりさせられてる立場なんだ。言ってみれば監禁されてるようなもんだし、例え万が一あの時任ってのをどうにかしちまっても、正当防衛は十分に通じるかもしれない」
「どうにかって……」
「……極端な話、殺しちまってもってことだよ」
大輝の言葉に、誰もが息を呑んだ。
「こ、殺すって、そんな……いくら何でも……」
「落ち着けって。極端な話の場合だ」
興奮しかけた夏樹を秦が制する。
「それに、その気だったら俺らはとっくに行動に移してる。そうしてないのは、まだ俺達が精神的に多少の余裕を持ってる証拠なんだろうけどな。けど、それも長続きはしないかもしれない」
秦が言い終えて、再び沈黙。

二分か、三分か。
そのくらいの時間が流れた頃に、豊は静かに口を開いた。
「信吾」
「……ん」
「昨日、寝る前に話してたことだけど」
「……うん」

その会話に、全員の視線が移る。
「曖昧でもいいから、話してくれないか？　もしかしたら、何かの糸口になるかもしれない」
「……でも、それは」
「……話して」
「志保？」
すぐ隣に座っている志保が、訴えかけるように言う。
「……このままじゃ、時間だけがなくなっちゃう。何もしないのは、ダメだよ」
「……」
それは確かにその通りだ。
けど、僕の言葉は余計な混乱を招くばかりか、ありもしない期待を持たせてぬか喜びさせる結果になるかもしれない。
言わば諸刃の剣なのだ。
一見、救いを提示しているようで、実は裏づけの根拠は何もない。
……いや、なかったと言い換えるべきだろうか。
今はその裏づけとなる根拠に、心当たりが何もないわけではない。
しかし、それもまだ根拠としては弱い。
警察の尋問を、犯人が簡単に抜け出せるように。
「……高居、話して」
「慶子……」
「変な期待は持たないから。でも、確かにきっかけにはなるかもしれない。一人で抱えてても、気持ち悪いだけじゃない」
「……」
……それも、そうか。
「……分かった。話すよ」
期待は持たないとは言ったが、それは無理な話だろう。
こんな状況では、妙にもったいぶったような布石があるだけ、逆に期待をもたれてしまっているかもしれない。
「でも、本当に鵜呑みにしないで。頼りない仮説で、話すほうが恥

ずかしいくらいだから」
全員が頷くのを確認して、僕は溜め息を一つ吐き出し、話を始めた。
「僕が気になったのは、これなんだ」
そう言って、僕はポケットの中からルールの書かれた紙を取り出し、その場に広げる。
誰が言うでもなく、皆の視線は紙に書かれているルールに走る。
「で、どれなんだ？」
浩二が聞く。
どうやら、ルールの中におかしな点を見つけたと思っているようだった。
それは他の皆も同じで、各々が自分で持っているルールの紙を取り出し、改めて読み返したりしている。
だが。
そうではない。
僕が気になったと言ったのは、ルールの中にある疑問などではない。
「――この紙そのものが、すでにおかしいと思わない？」
その言葉に、紙面を走っていた視線が再び僕の元に集中した。
「……どういうこと？」
志保が聞く。
「もしかして、この紙に何か仕掛けがあるの？」
「……炙り出しとか？」
「けど、信吾の紙はどこも燃えたりした様子はないよ」
「……それじゃあ、水で濡らすとか？」
皆、紙そのものに何か仕掛けがあるのではないかと疑う。
けど、そうでもない。

確かに紙そのものがおかしいとは言ったが、そういう意味ではないのだ。
僕が言いたいのはつまり……。
「――この、ルールを書いた紙をわざわざ持たせているってことが、おかしいんだよ」
「……どういうことだ？」
秦が聞き返す。
僕はルールの紙を拾い上げ、答える。
「……このゲームは、僕達が勝てばこの館から脱出できる。じゃあ、負けたらどうなる？」
全員に問う。
その問いはあまりにも簡単で、誰もが答えを知っていた。
「……僕達は全員、館とともに炎上する」
真っ先に答えたのは豊だった。
しかし、答えは全員が知っていた。
聞くまでもないことだったからだ。
「そう。早い話が、僕達は死ぬ。もしかしたら何人かは運良く助かったりするかもしれないけどね」
「……それが、どうかしたの？」
「……負ければ僕達は死ぬ。この言葉が本当か嘘かは、ゲームが終わるまでは確認することはできない。けど、僕達に限らず、敗北は死なんていう条件を突きつけられたら、誰だって驚くし、恐怖を覚えるよね？　確かに、たかだかゲームで人の命を奪おうなんて、正気では考えられないけど、そういう意味では、このゲームの立案者は狂気を逸している。少なくとも常人とは思えない」
誰も何も言わず、言葉を聞き続ける。
「だから僕は、とりあえず罰ゲームが死っていうことは嘘じゃないとして考えてた。このゲームの立案者は常軌を逸した異常者で、ど

うあってもゲームになぞらえて僕達を皆殺しにするつもりなんだろうって」
「……それで？」
沈黙を破り、浩二が先を促す。
「……だからこそ、この紙はおかしいんだ。そんな狂人が、どうしてわざわざご丁寧に、こんなヒントになるようなものを手渡しておくように支持したのか。もちろん、これ自体が罠の一つである可能性もあるけど、それにしたって人数分用意するなんて、やけに手間隙かけてる気がするんだ」
もう一度全員の視線が紙に向かう。
そこに書かれたルールに関する記述は、一言一句違うところはない。

「そう考えると、別の理由が見えてくる。つまり、この紙はこのゲームに関するもう一つの意味で、必要最低限なものだったんじゃないかって」
「……もう一つ？」
聞き返す志保に、僕は頷いて答える。
「一つは、言わなくても分かるよね」
「……ルール、ね？」
「そう」
夏樹の言葉に僕は答える。
「ゲームである以上、ルールがなくちゃ始まらない。だから紙に書かれたルールは、必要最低限の一つだ」
「じゃあ、もう一つは……」
大輝が言いかけ、全員が口を閉じる。
一拍の間が流れた。
そして何かに気づいたかのように、雅が顔を上げ、呟く。
「……そっか。そういうことなのね……」
「雅ちゃん、分かったの？」

「……なるほど、確かにこれは……」
「……どういうことだ？」
気がついた者、そうでない者といるようだが、僕はそれを無視して静かに告げる。
ルール以外の、もう一つの必要条件を。
「――答えだよ」

ｓｔａｇｅ９：合図と時計

「……答えって……」
「ど、どういうことだよ？　何で答えが……」
そう。
普通に考えたら、答えがすでに配られているなんて、ありえない。
そして事実として、明確な答えは何一つとして僕達には与えられていなかった。
回りくどい言葉を使ったせいで混乱を招いたかもしれないけど、僕が言いたいのはそういうことではない。
つまり。
「例えば、このゲームに僕達が負けたとする。そうなれば僕達は、館ごと炎の中に置き去りにされるわけだけど……」
皆が息を呑む。
空気の塊がごくりと音を立て、肺の奥に転がっていくのが手に取るように分かった。
「そうなった場合、トリックの答えが証明されないままになるとは思わない？」
「あ……」
「た、確かに、言われてみれば……」
「極端な話、出題側は違うと言い張りさえすれば、いくらでも僕達を負かすことができるんだ。いや、もしかしたら最初から答えなんて用意されていないのかもしれない」
「そ、それじゃあ……」
「うん、最初からこのゲーム、僕達に勝ち目なんかないってことになる。けど、それは逆にありえないよ。だったらなおのこと、こんなルールを書き記した紙を配る必要なんてないんだから」
そして再び、全員の視線が紙に向かう。

僕はそれを見越し、続ける。
「……つまり、このゲームはとりあえずは公平に……僕達にも勝ちの目が出るようには作られてるってこと。その上でこんな紙を配ったっていうことは、それ自体が僕達の勝利条件に関わっているアイテムだから……」
「……ってことは」
「うん。トリックはこの紙に書かれた、ルールの中に隠されてるんだと思う。けど……」
僕は紙から視線を戻し、皆に言う。

「分かったのはここまでなんだ。結局のところ、肝心のトリックがどう仕掛けられているか、そしてそれが何なのかは、まだ分からない」
「……でも、もしも信吾の言うことが正しいとしたら、大きな手がかりだ」
「……正直、自信はないよ。僕がこう考えることだって、もしかしたら出題者にはお見通しのことなのかもしれないしね」
「そうだとしても、現状じゃ他にそれっぽい意見もないだろ？」
浩二が聞きながら見回すと、やはり皆は黙って頷いた。
「……やってみる価値はあると思うわ。話を聞いた限りでも、納得できることは多かったもの」
「私もそう思う。どの道、このままじゃ時間切れになっちゃうもん」
「……そうだな。俺も信吾の意見を取り入れるべきだと思う」
まるで暗闇に差し込んだ一筋の光にすがるように、皆の意見が一つになっていく。
こういう極限状態で恐ろしいことは、皆の意見がバラバラになって孤立と対立を繰り返してしまうことだ。
そういう観点から考えれば、この団結は悪いことではない。
だがそれだけに、僕にも見えない圧力がのしかかる。
ここまで意見をまとめておいて、その判断がもし間違っていたら？

全くの見当はずれな、単なる妄想だったら？
全てを言い終えた今だからこそ、僕は後悔する。
本当は何も言わず、黙っていればよかったのかもしれない。
もしも間違いだった場合、僕はその責任を取ることなどできない。
いや、それ以前に皆死んでしまうだろう。
そう考えるなら、何もしないよりははるかにマシなのかもしれない。
けど、それでも……。
「……」
苦しい。
気が重くなって仕方がない。
自分の居場所がここにはもうないようで。
いっそのこと、逃げ出してしまいたくなる。

……そうさ。
大輝達が言っていたように、この人数全員でならば時任一人くらいなんてどうにだってできる。
万が一殺してしまったとしても、僕達が受けた被害を考えれば、正当防衛だって成り立つはずだ。
いっそ、殺してしまえばいい。
そして扉を蹴破り、館の外に逃げてしまえばいいんだ。
橋の問題は残るが、その気になれば崖下の河に飛び込んだって構わない。
むしろそっちのほうが、助かる可能性はずっと……。
「っ……！」
奥歯が軋んだ。
いつの間にか指先が震えている。
皆は各々に紙に目を落とし、あらゆる可能性を示唆している。
そんな光景を見ていると、ひどく居心地が悪い。
まるで、皆を操っているようで……。

真っ直ぐに見ていられない。
俯き、視線を逸らした。
そんなときだ。
震える手に、誰かの温度が重なる。
「……志保？」
少し視線を逸らすと、志保が隣で僕の手を握っていた。
その手は僕の手よりも一回りほど小さく、ひどく細く華奢なものだった。
「大丈夫。信吾は、間違ってないよ」
志保は小声で、僕にだけ聞こえるように呟く。
「助かるよ、きっと。皆一緒に」
その言葉は、根拠のないものだった。
志保が無理して笑っているのは明らかだった。
けれど、それでも。
震える指先は、いつの間にか落ち着いている。
「がんばろう。ね？」
「……うん」
見えない重圧が、風に飛ばされたようにふと軽くなる。
昔から、何一つ変わらない。
いつでもどこでも、どんなときでも。
僕はいつも、最後には志保に励まされてばかりだ。
……考えろ。
僕だって、まだこんなところで死にたくなんかない。
絶対に生きて帰るんだ。
十二人のうち、誰一人として欠けることなく……。

時間が経つにつれて、焦りは必ず出てくる。
言葉にこそ誰も出さないが、内心では必死だった。
だが、その反面、色々な意見も出るようにはなっていた。
しかし、そのどれもが決定力に欠けるものばかり。

着眼点はいいものの、トリックを見破ったと豪語するには最後の一押しが足りないものばかり。
「……これもダメか」
「いい線だと思ったんだけどな」
「……仕方ないよ。他、何かある？」
と、ここで一度意見が途切れた。
しばらくの間ぶっ通しで意見を出し合っていたので、さすがに疲れの色が見え始めている。
が、のんびりと休んでいる暇はない。
休憩時間と称されたこの思考時間は、刻一刻とリミットに向かっている。
この休憩が終わればゲームの後半戦が始まり、それが終わることはそのままタイムリミットを意味することになる。
そうなれば、仮にゲーム途中でトリックを見破っても何の意味もない。
ようするに、僕達はこの休憩時間の間にトリックを見破らないといけないのだ。
「……少し、休憩しよう。のども渇いた」
「……そうね。煮詰めすぎても、逆に頭が痛くなっちゃう」
各々に立ち上がると、トイレに向かったり少し横になったり、冷蔵庫の中から飲み物を取り出し始める。
「信吾、飲むか？」
「うん、ありがとう」
秦が持ってきたミネラルウォーターのペットボトルを受け取る。
のどはカラカラだった。
一口含むと、のどの奥で微かに痛みを覚える。
皆、ほとんど無言だった。
無理もない。
あれだけ様々な意見を交し合ったのに、決定的なものは一つもなかったのだから。

一番多かった意見は、やはりというかあれだった。
――勝利条件と敗北条件が重なっている矛盾が、トリックであるということ。
確かに、この意見は嫌でも目に付くものだ。
実際言葉としての矛盾が目に見えて明らかなだけ、気にするなというのが無理な話である。
だからこそ、逆にそこには何も仕掛けがないと考えることも定石。
しかし、さらにその裏をかいて……というように、堂々巡りの議論になってしまうのだ。
結論から言うと、僕はこの矛盾はトリックではないと思っている。
仮にこれがトリックだったとしても、それを見破ったことによって浮上する新事実がどこにもないからだ。
トリックが仕掛けられている以上、嘘を見破れば代わりの真実が出てくるはず。
が、この矛盾を見破っても、新しい事実が何も出てこない。
いや、逆だ。
この場合、二つの真実が出てしまうのだ。
一つは、僕達の勝利条件が別のものであるという可能性。
もう一つは、敗北条件が別のものであるという可能性。
そのどちらに関しても、その別のものとして該当する新たな条件が見出せない。
なので、やはりこの矛盾はトリックではありえない。
……おかしな話だ。
矛盾とは、意味の取り方によってはそのままトリックであるということに繋がりそうなものだ。
その矛盾がこれだけ堂々と目の前にあるのに、それゆえにトリックではありえない。
奇術師は、そのマジックに仕込んだタネが大掛かりであればある

ほど、人目につきやすい場所に堂々と晒しておくという。
このトリックとやらも、そうなのか？
それともやはり裏をかいて、極力目に付かないところにうまく隠しているのだろうか。
それとも……。

「……なぁ、ところで今何時なんだ？」
ふと、康祐が聞いた。
「……私達、何時間くらい話してたっけ？」
「ていうか、時間なんて分かるわけないじゃない。私達、ゲーム始めるときに時計とか携帯とか、全部取り上げられてるんだよ？」
「げ、そうだった……」
「あ、それなら大丈夫。外に出て、時任さんに聞けば教えてくれるよ。僕も起きたばっかりのとき、時間が分からなくて聞いてきたから」
「でもよ、それでデタラメな時間教えるとかしてんじゃねぇの？」
「いくら何でもそこまでしないだろ。仮にも二十四時間きっかりで終わらせるゲームだって、ルールに書いてあるくらいなんだぜ？」
「ま、それもそうだな。んじゃ、俺聞いてくるわ」
康祐が立ち上がり、部屋の扉に向かう。
「……それにしても、ゲームっていうくらいならもうちょっとマシなものを用意してほしいよな」
「同感ね。そもそも参加なんてしたくもなかったのが本音だけど」
「部屋を渡り歩いて待つだけのゲームなんて、聞いたことないぜ」
「だな。俺なんて、一時間ごとにあの時任ってのが覗きに来るんだ。鐘の音といい、時計代わりもいいところだ。そんなに時間厳守させたいなら、最初から時計や携帯を取り上げなければいいのによ」
「携帯はまぁ、連絡手段を遮断するためだとしても、時計まで取らなくてもいいっていうのは賛成ね」
「そもそも、ここって圏外だった気がするんだけど」

そんな、愚痴にも似た会話の中に。
「……」
僕は、何かを見つけたような気がした。
ガチャリと、康祐がドアノブをまわす音がして、その音で僕は立ち上がった。
ゴトンと、手の中のペットボトルが床の上に転がる。
その様子に、扉に手をかけた康祐も含めて、全員の視線が集中していた。
しかし、僕はそんな様子など気にも留めなかった。
「……信吾？」
志保が不思議そうに聞く声。
それさえも今は遠い。
「……おい、どうしたんだ信吾？」
「具合でも悪いの？」
「大丈夫か？」
「……何か、思い出したの？」
皆の声が響く。
けど、それはすぐに雑音となって掻き消える。
ノイズが消え、クリアな音だけが残る。
それが、真実かどうか。
今はまだ確信はない。
だから、繰り返し確かめる。
「……康祐」
「何だ？」
ドアノブを一度離し、康祐は振り返る。
「……今言ってた、一時間おきに……っていうのは？」
「ああ、それか。ほら、このゲームって、一時間でそれぞれ一部屋ずつ進むわけだけどさ、最後の一人……つまり夏樹だけは、移動した先の部屋に誰もいないことになるだろ？　そうなると、俺の部屋

を訪ねてくるのがいなくなるから、アイツが毎回俺のところに開始の合図を言いにくるんだよ」
「……開始の、合図……」
「別にそんなことしなくても、鐘の音が三度鳴ったら俺は動けばいいわけだしさ。意味あんのか分かんなかったんだけど……」
「……」
「……でも、それがどうかしたのか？」

――開始の合図を言いにくるんだよ。

――鐘の音が三度鳴ったら、俺は動けばいいわけだしさ。

「……康祐、ごめん。もう一つだけ、答えて」
「あ、ああ。何だ？」
「その開始の合図って、いつから？」
「いつって……そりゃ、ゲームが始まった最初からだよ。全員が割り当てられた部屋に入って、六時になった直後から」
「……最初、から。間違いない？」
「……ああ、間違いない」
何かが。
僕の中で、何かが見え始めていた。
トリックはルールの中にある。
嘘、本当、矛盾。
トリックとは、嘘であるとは限らない。
嘘とは、本当ではないということだ。
つまり、トリックとは……本当ではないということ。
ルールの中に、本当ではないことがある。
それは……？
「……もういいか？　俺、時間聞いてくるぞ？」
「あ、うん。引き止めてごめん……」

と、言いかけて。

――現在、午前五時二十三分です。

今朝の、その会話が。

違和感を覚えた、わずかなやりとりの、その正体が。

「……そう、か……」

全てが、見えた。

「待って、康祐！」

「な、何だよ？　まだ何かあるのか？」

「ううん、そうじゃない。皆で行こう」

「行こうって……どこへ？」

「時任さんのところ」

「時間聞くのに、わざわざ全員で行かなくてもいいんじゃ……」

「違うよ。時間を聞きに行くんじゃない」

「え？」

全員の視線が集まる。

一拍の間を置いて、僕は宣言した。

「――出るよ。この館を」

stage10：夏の日

十二人分の足音。
扉の向こうへ、今……。

「……う」
眩しさに目を覚ます。
カーテンの隙間から日差しが入り込んでいるらしい。
寝返りをうって、僕はその光から逃げる。
ゴロンと半回転。
木目調の、年季の入った感じの天井が見えた。
ほぼ同時に、窓の外から小鳥の鳴き声。
もう少し耳を澄ませば、波の音も聞こえただろう。
「……そっか。僕達は……」
目元をこすり、ゆっくりと体を起こした。
広さ十畳ほどの和室に、僕の他に男子が五人。
どうやら他の誰もがまだ夢の中にいるようで、歳に見合った無垢な寝顔を覗かせている。
壁掛け時計の時刻を見ると、もう間もなく六時半になろうとしていたところだった。
起床時間は予定では八時だから、ずいぶんと早く起きてしまったことになる。
僕はもう一眠りしようかとも思ったが、思いのほか眠気が吹き飛んでいることに気づく。
これでは二度寝は期待できそうにない。
「……顔でも洗ってこよう」

他の皆を起こさないように、静かに立ち上がり、部屋を出る。
ふすまをそっと閉め、階段を下りて階下へ。
建物自体が古いせいだろう、そっと歩いたつもりでも大げさなくらいに軋む音がする。
廊下を奥へ。
蛇口をひねると、この季節には気持ちがいいくらいの冷たい水が出た。
何でも、井戸水を直接引っ張っているらしい。
と、昨日聞いたそんな話を思い出しながら、僕は顔を洗った。
妙に気分が清々しい。

タオルで顔を拭きながら、部屋に戻ろうと来た道を引き返す。
食堂の方では何人分かの物音がしていた。
恐らく、朝食の準備などはもう始まっているのだろう。
僕は軋む階段を慎重に上がろうとして、ふと玄関の方に目が向いた。
その向こう側、外の景色の中に、見覚えのある背中と後ろ髪を見つけた。
「……志保？」
多分、間違いない。
あの髪の長さと背格好からして志保だろう。
こんな朝早くに何をしているのだろう？
僕と同じように早く起きてしまって、それで外に散歩にでも行ったのかもしれない。
「あら、早いのね。おはよう」
階段の下で突っ立っていると、宿のおばさんの一人に声をかけられた。
「あ、おはようございます」
「朝ご飯、もうしばらく時間がかかると思うから、それまでゆっくりしてるといいわよ。何だったら、あの子みたいに少し散歩でもし

てきたらどう？　すぐそこは海岸だし、風が気持ちいいよ」
「……そう、ですね。じゃあ、そうします」
僕は小さく頭を下げ、玄関で靴を履き替えて外に出た。
「う、わ……」
外に出た瞬間、電灯を目の前に突きつけられたような強烈な日差しに見舞われた。
いくら夏でも、この日差しはすごい。
片手で日差しを防ぎながら、僕は細い二車線の道路を横断し、そのまま海岸に続く短い階段をおりた。

「あ……」
その足音に気づいたのだろう、すぐ先にいた志保がこちらを振り返った。
「おはよう」
「うん、おはよう。早いね。よく眠れなかった？」
「ううん、そんなことはないよ。でも、気がついたら目が覚めちゃってた」
「そっか。実は僕もなんだ」
僕達は波打ち際に立っている。
足元の砂浜は見たままの砂色で、目の前では青い波が押しては返している。
足元ギリギリのところまで押し寄せてきたと思うと、あっさりと引き返していく。
頭上には灼熱の太陽。
ギラギラと輝くそれは、限度というものを知らないようだ。
「暑いし、どこか日陰に行かない？」
このまま立ちっぱなしだと、ものの十数分で日射病になってしまいそうだ。
周囲を見渡してみると、少し離れたところに木陰を見つけることができた。

ちょうど岩場になっているところで、その裏にある雑木林の木の一部が垂れ下がり、屋根のようになっている。
僕がその場を指差すと、志保は無言で頷いた。
「ふぅ、暑い暑い……」
「夏だもん。当たり前だよ」
「それにしたって、ちょっと異常なくらいだよ。毎年のことだけど、年々気候がおかしくなってるとしか思えない」
このままだと日本水没の日も、そう遠いことではなくなってしまうかもしれない。
「でも、こういうのも普通だと思う。少なくとも、常識で考えられるから」
「……まぁ、そうだね」
「……」
「……」
そこで一度、会話が途切れる。
多分、同じことを考えているのだろう。
無理もない話だ。
昨日のことなのだから。

――僕達が、日常に回帰したのは……。

僕達は館を脱出した。
もちろん、ゲームをクリアして、だ。
そして消えたはずのつり橋は、確かに僕達の前に再び姿を現し、それを渡って僕達は向こう岸へと辿り着いた。
記憶を辿ってあの洞窟の中から続いていた道を見つけ、一度通ったその道を戻った。
そして洞窟の中に戻った瞬間、僕達は全員同時に意識を失った。
どれだけの時間そうしていたのかは分からない。
しかし、全員が目を覚ましたのもまた同時だった。

僕達十二人は洞窟の岩肌にもたれていたり、地面にそのまま横たわっていたりして倒れていた。
ケガらしいケガもなく、全員の無事はすぐに確認できた。
その、直後のことだ。
浩二が自分の携帯電話を取り出して、その異変に気づいた。
日付は、僕達が始めてこの場所を訪れた日を示していた。
つまり、ほぼ一日前のものだ。
浩二だけではない。
携帯を所持しているメンバーの全員が、同じ日付と時刻を示していたのだ。
本来、それはありえない。
何故なら僕達は、少なくともあの館の中で一晩を過ごしているはずなのだから。
それなのに、デジタルの文字や数字は一日前を示している。
が、すぐに思い当たる。
これらの携帯や時計は、一度あの時任と名乗った男に預けていたものだ。
もしかしたらその際に、何か仕掛けをされたりして時間が狂っているのかもしれない。
そういう考えも確かに考えられたのだが、とりあえず僕達は洞窟を一度出て、地図に従って宿に向かうことにした。
考える時間はそれからでも十分あるのだから。
徒歩でおよそ十五分ほど歩くと、宿が見えてきた。
海沿いの道にある二階建ての和風な造りで、正直言って見た目は古かった。
しかし内装はしっかりしているようで、和室というのがどこか僕達の疲れ果てた心を落ち着かせたのかもしれない。
この時点ですでに夕方になっていたので、この日はそのまま宿の中で時間を過ごすことになる。
夕食までの時間で部屋割りや荷物の整理を済ませ、夕食後は各自

自由に過ごす。
が、やはり疲労は皆溜まっていたのだろう。
その日は夜の従事近くになるとほとんどのメンバーが眠ってしまっていた。
かく言う僕もその中の一人だった。
とにかくそのときは休みたかった。
体以上に、頭が鉛のように重くのしかかっていた。
眠りに落ちる直前、ふと思った。
この日、誰もゲームのトリックに関して聞いてはこなかったのだ。
聞くのを恐れているのかもしれないし、単に疲れていてそれどころではないのかもしれないが……。
恐らく、明日になれば聞かれることもあるだろう。
そのときは……。
どうしようかと考えている途中で、僕の意識は落ちた。

「……戻って、きたんだよね？」
遠慮がちに志保が聞く。
「……だと思う」
「……夢、だったのかな……？」
「……そうじゃないと思う。信じられないけど、あれはやっぱり……」
一つの現実として、目の前であった事実なんだろう。
あのリアリティは、夢や幻といったものとは明らかに違う……何かこう、うまく言葉にできない圧迫感を持っていた。
それ以上に、あの窮地に立たされたときに感じるような緊迫感。
とても夢幻のものとは思えない。
「忘れたほうが、いいの……かな」
「……どうだろう。忘れようとしても、忘れられないと思うけど」
「信吾は、どっち？」
「え？」

「……忘れたい？　それとも、忘れたくない？」
「……僕は……」
……どうなのだろう。
「……どちらでもない、かな。多分、忘れたい忘れたくないに関わらず、記憶の中に刻み付けられると思う。すっかり忘れたつもりで何年も経ったとき、ふとした些細なきっかけではっきりと思い出すと思う」
だって、イメージが強烈過ぎるんだ。
仮に一度は忘れても、いつか思い出したらその後は一生忘れられそうにない気がする。
「志保は、どうなの？　忘れたい？　忘れたくない？」
「……私は……」
潮風が吹いた。
僕達の間を吹き抜けていく。
涼やかで、いい気持ちだった。
「……分かんない」
志保は答えて、砂浜を歩き始めた。
僕は無言で、その背中を追いかけた。

朝食が終わって、午前中の涼しい時間は宿の部屋で宿題などをこなしながら過ごしていた。
一晩時間を置いたおかげで、皆も少しずつ落ち着きを取り戻しているようだ。
昨日のような無言の時間はほとんどなくなり、いつも通りの賑やかさと騒がしさを足して二で割ったような声が飛び交う。
僕も皆と会話をしながら、数学の宿題にペンを走らせている。
教科ごとに分担を決めて、あとで皆で写し合うというお決まりの作戦だ。
丸写しだと怪しまれるので、各自で適当に多からず少なからずをわざと間違えておくのがコツである。

「よし、終わった」
男子の六人の中で一番てこずっていた大輝が、ようやくペンを置く。
「あー、英語はキッツイわ」
「クジ運だな。お疲れ」
大の字に寝転がる大輝に、康祐が冷えた麦茶を差し出す。
「昼まで時間あるし、少し休憩しよう」
壁掛け時計はちょうど十一時を示している。
「隣は終わったのか？」
「どうだろ。見てくるか」
秦が立ち上がり、廊下に出て隣の部屋をノックする。
「おーい、そっちはどうだ？　一区切りついたか？」
ふすま越しに声をかけると、中から足音が聞こえてくる。
ガラリとふすまが開き、女子六人が顔を覗かせた。
「あ、そっちも終わったの？」
ふすまを開けた夏樹が声をかける。
「ああ。今休憩してるところだけど……って、おい、こだまどうした？」
見ると、こだまの額の上にはビニール袋の中に氷の入った即席の氷嚢が乗っかっており、何やらうーうーと唸り声を上げている。
「どしたの、あれ？」
「それがね……」
縁が苦笑いしながら言う。
「クジで教科を決めたんだけど、こだまが日本史の担当になっちゃってさ……」
「そういえば、こだまは歴史が大の苦手だったっけな……」
「あー、うー……」
唸り声が廊下まで聞こえてくる。
何とかノルマ達成はしたようだが、相当がんばったようだ。
「そんなにひどかったのか？」

豊が聞く。
「言葉では言い表せないわね……」
雅が苦笑いしながら答える。
「中臣鎌足を、生ゴミの塊って言ってたよ」
慶子が追い討ちといわんばかりに畳み掛けた。
「「「「「……」」」」」
男子一同、絶句。

ほどなくしてこだまが復活したので、僕達は皆で外に出た。
やってきた場所は、今朝僕と志保がいたあの個陰のある岩場だ。
大小様々な岩があって、どれもが座るくらいの大きさがあったので、誰が言うわけでもなく全員がそこに座った。
適当な会話を繰り返す中に、時折潮騒が混じる。
暑さも相当だったが、皆楽しんでいる様子だ。
そんな中で、ふいに浩二が聞いてきた。
「信吾、ちょっといいか？」
「ん、何？」
聞き返すと、浩二は少しだけ迷うような素振りを見せ、しかしはっきりと言った。

「――結局、あのゲームの答えは何だったんだ？」

それは小声でも大声でもない、普段の声の高さと声の色。
だから、その問いは他の皆にも当然聞こえていた。
会話が瞬間的に途切れる。
口には出さずとも、誰もが気になっていたことだったのだろう。
「悪い。雰囲気壊してるってのは自覚してる。それでも、俺は知りたいんだよな。性分なのかもしれないけどさ」
「……私も、興味があるわ」
「雅……」

他の皆も口には出さないが、その表情は真実を知りたいという面持ちだ。
分かってはいた。
多分、説明しないと皆が納得できないだろうなとは思っていた。
解いた僕には、説明する責任があるのだから。
「……少し、長くなると思うけど……いいかな？」
残りの十一人は、無言で頷いた。
「……分かった、話すよ」
全員が岩の上に座る。
それを見届けて、僕は話を始めた。
「――じゃあ、糸を解くよ」

stage11：continue？

一つ、休憩時間を含めたゲーム終了までの時間を、無事に過ごしきること。
一つ、ゲームに仕掛けられたトリックを見破ること。

以上が僕達の勝利条件であり、

一つ、ルールを破ること。
一つ、ゲーム開始から二十四時間が経過した時点でこの館から脱出できていないこと。

以上が僕達の敗北条件だった。

そして、答えは最初からここに用意されていた。
誰の目で見ても分かる、この場所に。

「……どういうことなの？」
「さっぱり分からないんだが……」
「焦らないで。一つずつ説明していかないと、僕もややこしくなっちゃうから」
一拍の間を置いて、僕は続ける。
「それじゃあ、トリックの説明をするけど……その前に、皆にも僕の質問に答えてもらうことになると思うんだ」
その言葉には誰も異論を述べなかった。
肯定と見ていいのだろう。
僕は再度話す。
「じゃあまず聞くけど……僕達の勝利条件は、トリックを見破ることと、もう一つは何だった？」

「何だったって、そりゃ……」
「……ゲームが終わるまでの時間を、無事に過ごすこと……だよね？」
「うん、そうだね。じゃあもう一つ質問。僕達の敗北条件は、ルールを破ることと、もう一つは何だった？」
「……ゲーム開始から二十四時間経過の時点で、館から脱出できていないこと」
「そう。そして、今の二つの答えがそれぞれ矛盾していたから、僕達はゲーム終了まで無事でいても、それは同時に敗北条件を成してしまうことになることに気づいたんだ。となると、残された勝利条件はもう一つの、トリックを見破ることしかなくなってしまう。多分、このゲームを考えた人物は、僕達がこう考えることまでは簡単に予想できたと思う」
予め用意された二つの手順のうち、一つが使用不可能となったらもう一つに頼るのは当然だろう。
それは僕達に限ったことじゃない。
恐らく、百人が百人そうすると言っても過言ではないはずだ。
「でも、だからこそ、なんだ」
「え？」
「だからこそ、そこにトリックを仕掛けられる。ダメだと分かりきっている手段の中にトリックを隠せば、それは必ず盲点になって、そう簡単には見破られることがないんだ」
「それじゃあ、トリックっていうのは……」
「うん。僕達がすぐに諦めて見向きもしなかった、もう一つの勝利条件の中に最初からあったんだ」
「……あの、矛盾した条件の中に……？」
「ウソ、そんなはずは……」
皆が口々にそう言うのは当たり前だ。
何度読み返してみても、そのルールの一文にはおかしいところは見当たらない。

実際、僕もそうだった。

一つ、休憩時間を含めたゲーム終了までの時間を、無事に過ごしきること。

一つ、ゲーム開始から二十四時間が経過した時点でこの館から脱出できていないこと。

この二つの文は、互いが互いを打ち消しあっている文章だ。

それゆえに、矛盾。

二つの条件を同時に満たすことは不可能。

それら二つが同じ属性の……つまり二つの勝利条件を同時にや、二つの敗北条件を同時に、などという場合ならともかく、相反する条件の中では絶対にありえない。

だからすぐに無視される。

紙の上の文字に目も向かなくなる。

そこにあって、ないものとして扱うようになってしまうんだ。

「この二つの文章は、それぞれ独立させていたんじゃ全く意味がないんだ。この二つを照らし合わせることで、ようやく見えてくるんだ。隠されていたトリックが」

僕はポケットの中からあのルールの紙を取り出し、広げる。

そしてもう一度、声に出して読み上げた。

「勝利条件の一つ。休憩時間を含めたゲーム終了までの時間を、無事に過ごしきること。敗北条件の一つ、ゲーム開始から二十四時間が経過した時点でこの館から脱出できていないこと」

そしてスゥと息を吸い、真実に辿り着くための最初のキーワードを呟く。

「重要なのは、ゲーム終了までの時間という言い方と、二十四時間経過という、二つの異なる言い方。どちらも意味するところは同じなのに、どういうわけか言い方を変えてあるでしょ？」

このクロックゲームは、ゲーム前半戦がまず六時間、そして休憩

時間を十二時間挟んで後半戦で六時間。
合計二十四時間をかけて行われるゲームである。
……では、なぜ。
ルールの紙でもそうだが、あの時任という男も、まるで徹底したかのようにゲーム終了という言葉と二十四時間という言葉を使い分けていたのだろうか？
ゲーム開始の時間も夕方の六時ちょうどであり、時任は腕時計で開始時刻を一秒のずれもないように確認していた。
そこまでしっかり管理しているのならば、いっそのこと二十四時間という言葉でまとめたほうが楽ではないだろうか？
二十四という具体的な数字を表現されたほうが、僕達としても意識しやすかったはずだ。
それなのにあえて、この二つの同じ意味を持つ言葉を使い分けたのには、きっと理由があるはずだ。
そしてそこから導かれる結論は、一つしかない。
僕は静かに息を吸い込んで、言った。

「――つまり、ゲーム終了という言葉と二十四時間という言葉は、同じではないということ。具体的に言うなら、クロックゲームが終わるまでに所要する時間は、二十四時間じゃなかったんだ」
「な……」
「で、でも、それじゃあ……」
誰もが驚きを隠せない様子だった。
けどそれは、この真実にたどり着いた僕も同じことだった。
先入観だったのかもしれない。
クロックゲームというゲームの名前に、まるで時計の文字盤を見立てて作られたような部屋割り。
そして徹底管理されたゲームのサイクル。
それら全てが、僕達を巧妙に欺いていた。
無意識のうちに僕達は、クロックゲームの開始から終了までは、

二十四時間ジャストであると信じ込まされていたのだ。
「ゲーム開始から終了までが二十四時間じゃないのなら……ましてそれが二十四時間未満なら、その差の時間の間に僕達は館の外に出ればいい。それだけで僕達はゲームクリアできたんだ」
誰も何も言わなかった。
驚愕の表情と、唖然とした表情が入り混じっている。
「……ゲーム開始の前に、僕達が時計や携帯など、時間が分かるものを取り上げられたのも、これが理由だったんだと思う。今にして思えば、綿密なスケジュールで僕達を動かす必要があるなら、時計とかは逆に持たせておくべきもの。なのに、部屋の中はおろかあの館で僕達が見た景色の中には、時計は一つもなかったんだ」
思い出す。
割り当てられた十二の部屋の中、どこにも時計がなかったことを。
「つまり、出題者は僕達に時間を知られては何かマズイことがあった。あるいはそれに近い理由が。だとしたらそれは、トリックに関係していることとしか考えられなかった」
けど、僕がこの考えにたどり着けたのは、一つの偶然があったからに過ぎない。
それはちょうど、休憩時間の仮眠から目が覚めた直後のことだった。
恐らく他の皆がまだ寝ている頃、僕は目を覚ました。
そしてふと思い立った。
このまま眠り続けていては、トリックに関する相談もできないまま後半戦に突入、なんてことにもなりかねない。
何しろこっちは時間の経過が分からないのだ。
実質、この休憩時間を利用することでしか、僕達にはトリックを見破る猶予はなかったのだから。
そこで僕は、ダメ元覚悟で時任に時間を聞くことにした。
すると時任は、こう言ったのだ。

「――……現在、午前五時二十三分です」

その時、時任が答えた時刻には何の意味もない。

ここで重要なのは、たった一つ。

――時任が、まるでためらう様子も見せずに時間を正確に教えたという、その一点だけだった。

この時点での僕は、まだトリックの正体には気づいていない。

だから僕は、この段階では妙な違和感を感じた程度にしか思わなかった。

だが、その違和感が僕の中から消え去るよりも早く、もう一つの手がかりが耳に入ったのだ。

それは、皆が起き出してトリックについて話し合っていたときのことだ。

案は挙がるものの、どれも決定打に欠けていた。

どれだけの時間を議論に費やしたかも怪しくなったので、康祐が時任に時間を聞いてくると言い出した。

そうなったのは、僕がそれよりも前に時任に時間を聞いたとき、教えてくれたと言ったからだ。

そして康祐は部屋を出る。

その直前に、皆の会話が入り乱れた。

「――でもよ、それでデタラメな時間教えるとかしてんじゃねぇの？」

「――いくら何でもそこまでしないだろ。仮にも二十四時間きっかりで終わらせるゲームだって、ルールに書いてあるくらいなんだぜ？」

「――ま、それもそうだな。んじゃ、俺聞いてくるわ」

「――……それにしても、ゲームっていうくらいならもうちょっ

とマシなものを用意してほしいよな」
「――同感ね。そもそも参加なんてしたくもなかったのが本音だけど」
「――部屋を渡り歩いて待つだけのゲームなんて、聞いたことないぜ」
「――だな。俺なんて、一時間ごとにあの時任ってのが覗きに来るんだ。鐘の音といい、時計代わりもいいところだ。そんなに時間厳守させたいなら、最初から時計や携帯を取り上げなければいいのによ」
「――携帯はまぁ、連絡手段を遮断するためだとしても、時計まで取らなくてもいいっていうのは賛成ね」
「――そもそも、ここって圏外だった気がするんだけど」

……一時間ごとに、合図をしにやってくる。

さらに。

「――その開始の合図って、いつから？」
「――いつって……そりゃ、ゲームが始まった最初からだよ。全員が割り当てられた部屋に入って、六時になった直後から」

……全員が割り当てられた部屋に入って。
……六時になった……直後、から。

この瞬間。
僕の中で何かが弾けていた。
絡まっていた糸が解けていく。
スルスルと、綺麗に。
「康祐、言ってたよね？」

「え？　何がだ？」
「時任が、開始の合図をしに部屋にやってきて、その合図の直後に、すぐに部屋を移動したって」
「……ああ。だけど、それが何だっていうんだ……？」
「直後。それが重要だったんだ」
僕は足元に落ちていた枝を拾い上げ、砂地の上に簡単な図を書きながら説明を続ける。
十二個の円を、あのときの部屋に見立てて時計の文字盤の位置に記す。
「一番最初の部屋割りを思い出してみて。一番から順に、康祐、雅、僕、縁、浩二、こだま、大輝、志保、秦、慶子、豊、そして夏樹」
十二の円の中に、それぞれの名前が書き込まれる。
「……まず、開始と同時に康祐が雅のところに動く。ここでまず五分経過を待つ」
矢印で移動したことを示し、その横に五と刻む。
この数字が、その時点での経過した時間の総計だ。
「五分経ったら、次は雅が僕のところに。ここでも五分待って、合計は十分。さらにその後、僕が縁のところへ。ここでも五分待って、合計で十五分。縁が浩二のところに行って五分待って、合計で二十。こだまで二十五、大輝で三十、志保で三十五、秦で四十、慶子で四十五、豊で五十、そして……」
この説明を聞きながら、皆も理解した。

「な、何で……？」
「これは……」
「……そうか、そういうことか」
「……ずれてる、の？」
「最後に、夏樹が空になった一番の部屋までやってきて五十五分。僕達は間違いなく、一人一回の移動を終えた。けど、実際はこの時点ではまだ一時間は経っていなかったんだ」

五分ごとに一人が移動するということを十二回繰り返す。
僕達はそれを五×十二＝六十という単純な数式にごまかされて、偽りのサイクルを刻み付けられていた。
「この時点で、夏樹は一番の部屋に移動してはいるけど、他の皆と違ってそこは誰もいない部屋なんだ。バトンを受け渡す相手がいなかったんだよ。そしてこのとき、すでに時任は二番に移動した康祐の部屋に顔を出している。そして夏樹が一番の部屋に入ったのを確認して、すぐに康祐に二週目開始の合図をする。このとき、もちろんあの一時間刻みになる三度の鐘も同時になる。だから実際は、夏樹の移動と康祐の移動は同時だったんだ。時任の合図の本当の意味は、夏樹の動きと康祐の動きを統一させること」
僕達は意図的に、時間の感覚を狂わされていたのだ。
「このやり方で、僕達は一サイクルを一時間と感じながら動かされていたけど、実際の一サイクルの所要時間は五十五分。前半六時間で、合計三十分の誤差が生まれていた。これが後半戦でも続くとすれば、さらに三十分を追加して合計一時間。実質二十三時間のゲームを、僕達は見せ掛けの二十四時間で終わらせることになる。そしてこれが、このゲームに仕掛けられていたトリック。その答えは……」
僕は砂地に書いた図に大きく×印を描いて、言う。
「――ゲーム終了の時点では二十三時間しか経過していないので、ルールの中の矛盾が成立しなくなるということだったんだ」
「「「「「「「「「………」」」」」」」」」
誰もが言葉を失っていた。
結局僕達が探し続けていたトリックは、真っ先に除外した矛盾のその奥に隠れていた。
矛盾とは、前後の文章が食い違ってしまうこと。

このトリックは、最終的にその矛盾を矛盾でなくするという、二重の仕掛けを施されていたのかもしれない。
堂々と用意された矛盾を、誰が手を加えて正しくあるようにとするだろうか。
このゲームは、そんな真理の隙間をついたものだったのかもしれない。
「……これが、僕が行き着いた結論。何の根拠も説得力もない、言い逃れしたい放題の穴だらけの推理だよ」
それが通じたことは、今となっては幸運だったとしか言いようがないだろう。
この推理を時任に話したとき、なぜ一つの反論もせずに僕達を解放したのか。
それだけが、今も僕の心を縛り付けていた。
言い逃れはいくらでもできたはずなのだ。
例えば、ゲームの時間経過のことだってそうだ。
時計こそなかったものの、僕達がこの五分の積み重ねの理論にたどり着くことを見越して、あの鐘の音に仕掛けをすることだって簡単なはずだったのだ。
予め鐘の音が鳴る時間の感覚を微調整しておけば、一度は早めた時間をいつでも元に戻すことはできたはずだ。
何しろ、ゲームそのものは一度移動を終えたら残りの時間を何もせずに過ごすという退屈極まりない内容だ。
何もしないこと以上に疲労が溜まることはない。
繰り返すうちに、僕達の体内時計も確実に狂いだすだろう。
削り取った時間を修復することは容易だったはずだ。
なのに……。
僕がこの事実を告げたとき、時任は言った。
相変わらずの白い仮面に素顔を隠したまま、ただ一言。
「――おめでとうございます。貴方達は見事に勝利条件を満たし

ました」

そして僕達は、館から出る権利を手にし、館を後にしたのだ……。
だから、もうゲームは終わったのだ。
固執するほうが間違っているのだと、僕も頭では分かっている。
……けど。
それでも、どうしても……。
「……よし。これでようやくスッキリした」
浩二が静かに言った。
「皆も、これでもうこの話はおしまいでいいだろ？　何にしたって、結果的に俺達はこうして無事でいるんだからよ」
「……そうだな。それでいいと思う」
「ああ、俺もだ」
「……それもそうね」
「もう、終わったことだもんね」
「うん」
「それじゃ、そろそろ宿に戻らないか？　もうすぐお昼だろ」
「どうりで腹が減ってるワケだ。午後は思いっきり遊ぼうぜ」
「よーし、めいっぱい泳ぐぞー！」
「あら？　こだま泳ぐの苦手じゃなかったかしら？」
「……め、めいっぱい浮かぶぞー！」
皆が笑い合いながら、砂浜を歩いていく。
僕はその背中を少しだけ見送ってから、ゆっくりと歩き出した。
「行こう、信吾。もう、全部終わったんだよ」
「……うん。そうだね」
志保の手を取る。
日差しとは違う、優しい暖かさがした。

「――それでは、セカンドステージの用意を始めましょうか……？」

GAME OVER・・・？

stage11：continue？（後書き）

こんにちは、作者のやくもと申します。

本作　Ｃｌｏｃｋ　Ｇａｍｅ　は、とりあえずここで一つの区切りとさせていただきます。
終わり方がいかにもアレな感じなのですが、実は続編というか番外編？　のようなものの製作を一応考えたりもしています。

ですが、その際はタイトルも一新してまた別の作品として投稿するつもりです。
今のところその連載開始は未定としか言えませんが、ある程度ネタが固まり、余裕があるときにでも書き始めてみようと思っています。

本作はジャンルでは一応ホラーの設定となっていますが、若干のミステリー要素を含んだ作品です。
むしろミステリーの色が濃いかもしれません。
しかし、作中のトリックは正直言って屁理屈のようなものです。
王道ミステリーなどではこのような使い方はまずされることもないでしょう。

早い話が私の文章力不足なワケですので、つまらない思いをさせてしまっていたら本当にすいません。
もっと精進しようと思います。

さて、長くなってしまいましたが今回はこの辺で失礼させていただきます。
最後までお付き合いくださった皆様、改めてありがとうございました。

縁があればまた別の作品でお会いしましょう。
それでは、失礼します。

やくも

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3850c/

Clock Game

2010年10月8日15時55分発行